

松葉名所和歌集第三 知利奴留遠和

千代古道 山城 葛野郡

- 六三七 続古子母し千代の古道跡とあり昔もふる松もみか南
- 六三八 新古さかの山千代の古道跡とあり又露分る望月の駒
- 六三九 又木里入も千代の古道舞かへり春のさか野は若柳摘覧
- 六四〇 新葉さかの山紅葉の錦立ててん千代の古道いとく御幸に
- 六四一 同 夏草のとしけかりさかの山思ひと出る千代の古道

長楽寺 同

- 長楽寺にて故郷の霞といふ心を執持ける
- 六四二 後拾山高み都の春を見渡せばは二むしの霞せりり
- 六四〇 長楽寺に住持ける比への許にいひつほしける
- 六四三 後拾思ひやれ霞とめたる山里に花待程の春のつれ
- 六四一 同 比こは木々の梢に紅葉して鹿とほけけ秋の山里

千沼海 根津 仙賞抄

- 六四五 万六ちぬわより雨を降くるしほの華綱子なほはりせりぬりてたへんかも
- 六四六 同 七 妹が為貝も拾ふともぬの海にぬれにし袖はほせとほけやす
- 六四七 同 土ちぬの海の次へ小松根がめて我恋渡るくへる子ゆへに
- 六四八 家集ちぬの海浪にたよふうつきみらの落を見るはたゆかしかりり
- 六四九 名舟ちぬの海の次へ小松塩こして浪の音に秋風はふく
- 千鳥港 同 春雨抄二国或日向
- 六五〇 袖中抄深山がと思ひ来ぬればはあてとりの港に塩と満くる

千尋浜 伊勢 紀伊二有同名

- 六五一 後撰伊勢の海の千尋の浜に拾ふ茶合は何くかひか有

木上 天皇上 定家 為家 為忠 入道

- 六五二 家集あひも見て君かきえなはけふ千尋の浜の名もなかせはん
- 六五三 同行さきと心もとなく頼みくる千尋の浜のかひと嬉しき
- 六五四 夫木いせの海ちいろの浜のますこもて君か代にへん教はかそへん
- 千本松原 駿河 長明道之記に見ゆ
- 六五五 見渡せばちもとの松の末遠みみとりにつく波の上哉
- 千草浜 浦 上総 兼盛
- 六五六 懐中いろくのかひ有てと拾はれ千草の浜をめぐるまに
- 六五七 夫木妻こひん秋の尾上の鹿よりも千草の吹かひよとぞ思
- 六五八 同 咲匂もくさの浦の塩風に秋はいろく浪とせくる

正言 上東門 下総 兼盛三首 和名千葉郡

- 千葉野 同 兼盛三首 和名千葉郡
- 六五九 万廿七はの野のてかしのはまはまれとあやにかなしみおきてたかきぬ
- 六六〇 続古けふよりせもこの松原契をく花はすかへり君は百代
- 六六一 続千ときなる千の松原色深み木高き陰のたもしき哉
- 六六二 新後拾君か代は契りも又し百年も千帰り深きもこの松原
- 六六三 類聚常船なる千の松原草深み篠の宿りも誰か知へさ
- 六六四 夫木すしききある祈りのかひ有てこの松原苔せむしける

道土守 無名 人丸 俊頼 千束橋 同 兼盛

- 六六五 兼盛昔か代はもこの橋を幾帰りはこみつさの教も知れす
- 千枝村 同 類家
- 六六六 続古樹葉のちよりの村にゆひして暈の明の手にせす

定衛

六六七 玉葉うつくしく千枝に咲く藤浪の盛も又し万代の春

竹生嶋

同 類々

六六八 名舟めだてて誰か見やらむ竹生嶋波にうつろ山影の玉垣
六六九 懐中としおひの竹につくししまちかくも世の浮事も閑波る哉

千坂浦

同 類々

六七〇 千載君が代の教にはしがかりなき千坂の浦のまきふ成とも
六七一 疎濼幾千年いさかゆかん御代なげやもさかの浦に千鳥鳴也
六七二 夫木わか君は千坂の浦にむれてゆるたつや雲ふためし城見
六七三 夫木皇は千坂の浦のまき石の雲ふにみゆる若と成まで

筑磨河

信濃 類々 小果郡

六七四 万十四倍濃なるもくまの河の細石も若しふみては玉と拾はん
六七五 風雅ちくま川春行水はすみにけり消ていくかの嶺の白雪
六七六 堀白水増ちくまの河は我なりす霧も深くそ立渡ける
六七七 平治百君が代は筑磨の川のさしれ石若むす若と成つす迄
六七八 夫木は捨の山をもめてしちくま川底にのみ社忍び渡らぬ

千賀塩竈

陸奥 類々

六七九 六百番へたりけるまきの嶋のわりなきに住かひなやちかの塩竈
六八〇 千五百松風の夏たけくまの涼しきは梢に秋やせかの塩竈
六八一 夫木うしろにみて命をまけし武土は教さたまれりちかの塩竈
六八二 同 夢にこそ都の事もみるまを袖に波くす千賀の塩竈
六八三 同 我思ふ心もしろく陸奥の千賀の塩竈近付にけり
六八四 新葉行て見し昔は遠き陸奥の思ひ出れは七かの塩竈

稜石

千滝山

丹波 藻塩

陸羽

千々河

同 藻塩

俊逸

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

俊城

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

巨房

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

無名

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

順徳院

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

頭仲

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

式子

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

内親王

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

兼輔

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

頭昭

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

忠良

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

忠隆

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

清賢

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

清賢

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

經高母

同 類聚

出雲 和名二嶋根郡

六八五 名寿年きへ絶しとも思ふたくふれはもたまの山にひける白糸

六八六 藻塩未遠きまの川瀬にまる玉は我皇の御代の教かも

六八七 拾遺今年よりも七の山は声絶す君か御世をも祈るへらなる

六八八 堀百嶺つま松の木しけくみゆる哉是や十年の山路成野見

六八九 名舟も七山こ代や昔のさしれ石若尾にふかき苔の色哉

六九〇 夫木春たもて霞たひびく十年山麓の里の花もあつらし

六九一 夫木動なき十年の山のつつかきは久しき御代の駿なりけり

六九二 夫木出雲なるもくみの決のかさなきに漕出て行はぶきの嶋みゆ

六九三 藻塩未遠き千里の汝に日の暮て秋風もくる岩代の松

六九四 題材雲さゆる千里の決の月影は空にししてふらぬ白雪

六九五 夫木見渡せばはさとの汝の外までも猫立あまる春霞哉

六九六 万七あゆもかた塩干にけらしちたの浦に朝漕舟の沖にもみゆ

六九七 万代あゆもかた堤音すなりらたの江の朝けの霧ははたほ隠て

六九八 夫木あゆもかた朝漕舟のほろくともたの浦に波すすみゆ

六九九 拾遺万代まかそん物は紀の國のもみろの汝の真砂せけり

義忠

能宣

師時

中務

正家

頼代

中務

中務

定家

淨忠

無名

覺性

中務

元輔

七〇〇 君が代の教にくらへは何なし千尋の浜のまき成とも
 七〇一 類聚うちへてなかけき御代とたのめをく十尋の海の浪のうけなほ
 七〇二 夫木永き日の暮のたぐ縄打はへて十尋の海に霞たひやく
 七〇三 同 たぐ縄の千尋の浜のくりかへしこれに霞のまきとす野見

千草嶽 同 藻塩

七〇四 山家妻けて行色のみならす梢さへくこの嵩は心せみけり

千賀浦 筑前 類考

七〇五 後拾七かの浦に波ませぐる心もしてひるまなかくも暮しつる哉
 七〇六 新後かひなしやみるあほかりを契にて猫袖ぬるもつかの浦波
 七〇七 名奇唐もちかの浦わの夜の夢思はね方と遠つ舟入
 七〇八 同 暁のこゝの浦風音さえて友なし千鳥波に鳴なり
 七〇九 新六千賀の浦にやく塩烟春は又びつ霞と成けける哉
 七一〇 夫木都思山夢跡はしはし夜千鳥声は枕にもかの浦風

鎮西 同

七一 拾玉にいしへ光にも猫まさるらん鎮むる西の宮の玉かさ

千代松原 同

七二 箱崎や千代の松原石たみくつれんよまて君はましませ
 千代河 筑後 八雲御抄或丹後
 七三 名奇我君のなかれえしとせ河波しつかな世に仕へつ
 七四 夫木君かたあかさりもあらし十年川なせきの波の幾あくりとも

公突 西園寺
 表隆 誠人
 七二一 万五墨繩をばへたふことくあてかをしちかのくきより
 大伴の御津の安へたはてに御舟はて人へみなく
 ささくはしてはやかへりませ

西行 七二六 名奇停のさきたつ月に音もそとて別ほちかの嶋よかなしき
 七二七 同 なをたのむちかの嶋へに漕くれはけけふも塩路に暮しつる哉
 七二八 同 白波のかされる山を見渡せばちかの嶋にはあらぬなりけり

西行 七二九 万五紅葉のちしふ山へ行舟のほひにめてさ出て来にけり

兼良 七三〇 懐中思ふもちみの山と聞からにふもとの原もなつかしき哉
 近見山 未勘

兼良 七三一 万十一秋風のちえのうらわ木つみなる心ほよりぬ後ほしらねと
 七三二 十五思ふ事ちえの浦わの浮木たによりあふ末はらりと社さけ

兼良 七三三 新六興つ風ちえの浦わのしき液も思ふおのの教はまさらし
 七三四 夫木たの住らえの浦わに我もさく老の液をばよせしとぞ思

兼良 七三五 新拾時をえて千田の村人幾千度とれと盡せぬ早苗成覧
 千田村 同

兼良 七三六 名奇都にく月の雲みや詠むらんちととの山の岩のかけ道
 七三七 同 都思ふ我心しれ夜半の月程も千里の山はこゆとも

兼良 七三八 夫木梁かへすちしほの岡の夕時雨猫もれなく残る榊柴
 千入岡 同

兼良 七三九 夫木君かたあかさりもあらし十年川なせきの波の幾あくりとも

兼良 七四〇 夫木君かたあかさりもあらし十年川なせきの波の幾あくりとも

兼良 七四一 夫木君かたあかさりもあらし十年川なせきの波の幾あくりとも

兼良 七四二 夫木君かたあかさりもあらし十年川なせきの波の幾あくりとも

仙覚抄 菅原松浦郡
 千代嶋 手紙と云り

大政 大臣

重之 伯

对馬 伯

人丸

寂蓮

知家

栞盛

時史 伯

法性寺

俊平

千年浦

同

七二九 夫木別にしと女浦の志貝けふそみつの波のつかひに

雲山

山城

ひんがし山雲山と云所にて読ける

七三〇 新緑古やさはつめの住家と思ふにもまた露けき苔の上哉

龍門

大和 類き

龍門の滝を見てよめる

七三一 古今たぬぬ衣さし人もなき物も何山姫の布味覧

ふと井のともな龍門より給はりける歌の返事によめる彼家の集にあり

七三二 舟雲とみえ人とはすは流出したつの門よりきたる水かも

七三三 愚^舟舟りうもん^舟の滝に降りし雪はかり雨にまかひて散楫哉

龍御山

未勘

七三四 名舟雲晴ぬりうの御山の時鳥空とかけりて鳴渡る哉

布引池 川

振津

七三五 襟百たぬぬ紅葉の衣染はてな山姫の布引の滝

七三六 堀後かちまけも誰かは見けむ年をへておなじ程成布引の滝

七三七 名舟幾年の天つ光にさす賢たか手作の布引の滝

七三八 同 水上は滝のみおにてはゆければ布引河の未せ水れる

七三九 兼集雲のつへにさす物のみ棚引はしく落くる布引の滝

七四〇 拾王布引の滝に光を残してや影消やらぬ有明の月

祐峯

七四一 詠藻いかなれや雲間も見えぬ五月雨に曝せふらん布引の滝

七四二 愚草布引の滝より外にぬきみたるまなく玉もる床の上哉

七四三 同 布引の滝に袂をあらそひて我年がみのいつれ高けん

七四四 同 秋の月袖に馴だし影ながらぬるかほなる布引の滝

七四五 同 玉吟いくよもしらぬ物ほ白雲のより落る布引の滝

七四六 玉吟はしあへぬ我ぞわかきの袖にかるぬれて久しき布引の滝

七四七 夫木白浪を初花とてや鶯のおりはてなく布引の滝

七四八 同 山姫の袂やはる布引の滝のあたりの梅の初花

七四九 同 布引の滝みよとてや呼子鳥此山中に絶す鳴覧

七五〇 同 紫の風を吹ける藤の花空より落る布引の滝

七五一 同 五月雨のおまぬ程は打はへて軒よりおつる布引の滝

七五二 同 布引の滝もやけふは御秋して水の白ゆふ岩にかくらん

七五三 同 かげうつす尾上の真萩咲しより花摺すらし布引の滝

七五四 同 風渡るお花かうれば布引の滝よりあまも夜かときみる

七五五 同 布引の滝の白糸夏くればたえずそ人の山路尋ぬる

七五六 同 若つとふ山の桜のしき波に風のかけたる布引の滝

七五七 同 石はしる音は水にとりしられて松風をくる布ひきの滝

七五八 同 秋もまた遠山姫の高根より何ゆへさす布引の滝

七五九 同 津の国の難波をとめのいとまみよきたら縫ぬ布引の滝

七六〇 同 さらしけるかひも有かな山姫の尋てきつる布引の滝

七六一 同 呉竹の夜のまの雨にあらみほして朝日に曝す布引の滝

七六二 同 さ波の天山守の手向とや白ゆふかくる布引のたき

七六三 同 いり日ですとよはた雲は布引の滝の上より暮かるみゆ

俊成

走家

同

同

家隆

家隆

隆光

隆光

道清

師光

隆光

隆光

同

走家

家隆

家隆

家隆

家隆

家隆

家隆

家隆

家隆

家隆

布引山

伊勢 藻塩

七六四 名寄 嵐吹雲のはたてぬきも薄みむら消渡る布引の山

沼尾池

帝陸

長明

七四一 同 ときは山水はたまりて流るとも若宿らずはまきりしもて

七五五 堀後波高く音に聞つる音羽河々にすまきまき渡りせけり

七六一 同 相坂のかけひの水に流るは音羽の山の紅葉なりけり

七七一 六番番をさしなへて緑にみゆる音羽山に花の楕成らん

七七八 山象集 春立と思ひもあへぬ朝戸出につしか霞む音羽山哉

七七九 拾玉 東より日をもひそげや春はまきし今朝しも霞む音羽山哉

七八〇 同 寒夜の深き氷にとられて音羽滝も名のみせけり

七八一 同 音羽山卯花かきに逢桜春と夏もや逢坂の関

七八二 同 音羽河音せきこし君ゆへに袂にかぐる滝の白糸

七八三 詠藻いつしかと春は霞のこえて行音羽の山や我身成覧

七八四 名寄 寺時鳥いかにさかまし音羽山麓の里に宿らさりせは

七八五 同 なる神の音羽の山の嶺の雲はるかに人のなりも行哉

七八六 玉吟 相坂の関のこなたに音羽川音に聞つる春はまきにけり

七八七 同 音羽河せきいれぬ池も五月雨に逢の立葉は滝おとしけり

七八八 御集 音羽川せき入水にみゆるかな浪さへくもる五月雨の空

七八九 同 子規初声そふ音羽河せき入る水の浪のたよりに

七九〇 建保 音羽川せきいれし波の打出て春まにけりとみえもする哉

七九一 同 音羽川雪けの波も若越て関のこなたに春はまきにけり

七九二 同 音羽河せき入る水も氷解て春やとまきと打出る波

七九三 同 水おし若間に波の音羽河音に都を出るうくひす

七九四 同 山風にうち出る波の音羽川水を分て春は来にけり

七九五 同 春さぬと若瀬の浪の音羽河水うち出て山風ぞ吹

七九六 同 春のたつ若間の波のまとは川ふかき哀のみえずも有哉

七九七 同 降つみし雪けの水の音羽河かなる春の色に出しん

七九八 夫木 鳴神の音羽の滝やまきららん関のこなたの立の空

朝忠

紀伊

兼昌

権大夫

西行

慈鎮

同

同

俊成

成房

家隆

同

同

同

同

行志

定家

定衡

俊成

内兵衛

忠定

行能

康光

中務

潤和河

未勳

人丸

無名

定家

の

無名

無名

無名

無名

無名

無名

伊勢

同

七六一 万十一 秋柏始ちや河へのしつゝあに人もあひみし君にまきしし

七六七 同 朝かしはぬるや川へのしつゝあに思ひてぬれは夢にみえけり

七六八 家集 眞出てぬるや河へのしつゝあに袖吹かふる秋の初かせ

沼入江

同

七六九 山象集 にはたふ沼の入江のものしたは人つけをぬかしにぞ有ける

七七〇 百首内 五月雨は沼の入江のみをつし岸の楸の楸なりけり

沼名河

同

七七一 万十三 ねりの蒸なる玉は求つゝえてし玉かもひろひつゝ

えてし玉かもあたらしき君か老くくおしも

音羽

山川滝

山城

山階第

七七二 家集 秋風音羽の山の谷水の波ちぬ袖も色こまやなぞ

七七三 同 音羽山木の下陰には鳥の見え隠せしかほぞ恋しき

七九同 水上や雲の成らんめまほの音羽の滝と空に聞ゆる
 八〇同 若かねに今も残る音羽川せきいれし滝の水くきの跡
 八一 夫木音羽山嶺の霞はたなびくと松の梢ははらりさりけり
 八二同 音にきく音羽の滝はけりふとてや若かみゆきは心みゆ野見

小塩 山 山城

八〇三 行書巻雪深き小塩の山にたつきし音き跡をもけりふは尋よ
 八〇四同 小塩山み雪つもれる松原にけふはかりなる跡やながらん
 八〇五 名寄柳さすもしほの山の姫小松さす千年の末ぞ久しき
 八〇六同 小塩山松の上葉にけりふやさは峯のうす雪花とみゆ野見
 八〇七 十五百有明も秋も名残は大原や月をもしほの山の端の空
 八〇八 建保行秋の名残をのみす小塩山待としもなき冬はさしにけり
 八〇九同 ふりにける神代も知す大原や小塩の山の松のしも雪
 一一〇同 染かぬて松に残さぬ秋の色も小塩の山は猫時雨けり
 一一一同 何ゆへに秋の余波をもしほ山小松が原はもみちやせし
 一一二同 小塩山今朝降雪のゆふがづら神代もわけてなびく松風
 一一三同 小塩山さるお梢は秋暮つるに紅葉ぬ松の村立
 一一四同 冬の夜も小塩の松の木間より白ゆふかけて月でもりくる
 一一五同 小塩山ゆふもしろき松葉のつもりも幾代の年つもる覽
 一一六同 小塩山秋のつたみほとまると松にあらず木枯の風
 一一七 秋葉集春もと若な摘てそ祈らさ小塩のひに年ふさ松
 一一八同 小塩山いかなる種の松なれば千よをよになしておふらん
 一一九 拾玉小塩山小松が原のあさ緑春の色をほ神の香みに
 一二〇同 千年まで祈るともしし神垣や若も小塩の松に契て
 一二一同 小塩山霞むる松のあさ緑はれはいと色やこしらん

行家 八三一同 小塩山松に千年もやとしをきて末もほらけき岩の内哉
 俊成 八三 詠藻柳葉を小塩の山にさしてて祝ひし千代や若か代の為
 同 八四同 若かへんもよる為とせ小松原小塩の山も祝ひ初けん
 行家 八五 名寄小塩山神代の春や契けん匂ひもつきぬ花の白ゆふ
 八六 夫木朝霜もしらゆふかけて大原や小塩の山に神まると比
 八七同 春にあふ小塩の小松がすくはまざるみどりの末ぞ久しき
 八八同 明けはきて猫かりゆかん小塩山小松が原の雪の夕くれ
 八九同 神無月晴みはれすみ持るもしほの山は時雨てせ行
 九〇同 みかりせぬ人に女せほや小塩山小松が原の雪のけしきを
 九一同 時鳥名残せいとをもしほ山小松が原の明ほのう声
 九二同 小塩山尾上松の枝毎に降白雪は花と見えつゝ
 九三同 小塩山めぐりくるまの玉すたれ行末かけて神や知覧
 九四同 今ほ猫心してふけ紅葉の散る小塩の山あらしの風
 九五同 小塩山松り葉とつる夕霜は色こそなるれ嶺の木枯
 九六 御葉小塩山小松が原の明ほのに峯をへたて立霞かな
 九七 小塩山 里々 山城
 九八 八三 一才多されはくしらの山に鳴鹿の今夜はなすいねにけらしも
 九九 堀百名を類み鹿のくさかひもなく小蔵の山にともしとそする
 一〇〇同 秋ふかみ物哀なるたせかれに小蔵の山に鹿ぞ鳴なる
 一〇一同 見渡せばさかも枯野と成にけり今や小倉に紅葉散らん
 一〇二同 駒ひへて麓の野へも尋ねればとくしすたく蟻虫哉
 一〇三 建保小倉山嶺の紅葉たさく馴て時雨せね夜もぬる袖哉
 一〇四同 小蔵山秋のあさけの霧隠れ色とみえね色皆野見

行家 八三一同
 俊成 八三
 同 八四同
 行家 八五
 八六
 八七同
 八八同
 八九同
 九〇同
 九一同
 九二同
 九三同
 九四同
 九五同
 九六
 九七
 九八
 九九
 一〇〇同
 一〇一同
 一〇二同
 一〇三
 一〇四同

行家 同
 俊成 同
 行家 同
 同
 隆信 同
 好忠 同
 行家 同
 伊奈 同
 後鳥羽 同
 又岡 同
 俊頼 同
 永縁 同
 師時 同
 国信 同
 有春 同
 順徳院 同
 行意 同

八四一 遠嶺 小蔵山秋の衣残りましを鹿の事つれなかしは
 八四二 同 ときく山鹿鳴秋の夕つくよおほらけなほ物思ひもや
 八四三 同 小蔵山峯の木葉や色に出てふりにしゆゆき今も待覽
 八四四 同 谷おけの小蔵の山の夕暮もありと斗もさほしかの声
 八四五 同 紅葉する小倉の山の夕つくもくぬ梢も下草そてる
 八四六 同 露霜のむくも錦たが為だをいはつてる山の秋風
 八四七 同 一家葉けふなれば小蔵の山の紅葉もまてそへてりて見え渡る覽
 八四八 同 ときく山さえしともしのこ念もなかならはずすはすくねほし
 八四九 同 秋の色は千種なかにやけきを誰か小蔵の山といふしん
 八五〇 同 ねたきめが小蔵の里に宿りして紅葉の色をよせに聞哉
 八五一 同 人しとてたらさる山のかし錦小倉の山の紅葉せけり
 八五二 同 楓咲山の若陰夕はへてとくしはその名の成成けり
 八五三 同 をしが馬小蔵の山のすそちかみ唯ひとりすむ我心かな
 八五四 同 小蔵山麓に秋の色はあれや梢錦風になれて
 八五五 同 我ものと秋の梢を思ふかな小蔵の里に家おせしより
 八五六 同 秋はけいぬと小蔵の山に鳴鹿は声の内や時雨とむ覽
 八五七 同 詠藻露けきは我身のさかき小蔵山麓の野へは秋ならぬ共
 八五八 同 享抄小倉山すそを薄まほせけり今夜ほこに宿をかしまし
 八五九 同 玉吟思ひかねまよ鹿もねにけし我と小蔵の山の滴に
 八六〇 同 小蔵山西こそ秋と尋ぬれば夕日にほかぬ嶺の紅葉よ
 八六一 同 心あてにおほらばおらん夕附日すや小倉の嶺の紅葉は
 八六二 同 夫木小倉山夕へいそきて出づれと内野の野は暮ほてけり
 八六三 同 小蔵山下行水のさかき石もくたけて物も思ふ比かな

愛宕里

山城

和名若園

愛宕郡

定家 八六八 夫木わが国のやすのほりの内にしをもたきり里大宮所
 定衡 八六九 舞臺朝多になくぬをたつる小野山はたえぬ波や音無流
 忠定 八七〇 六百番さびしきけしめととみる朝またきけたれ霜ふる小野の榛原
 知家 八七一 名寄思ひあまりいかに浅さん小野山の若かさこる谷の下水
 範宗 八七二 里入は小野の山田に今よりや色なき稲の早苗取覽
 行能 八七三 寸首忘れては冬かきと思ふ卯花の雪ふみ分る小野の通路
 躬恒 八七四 卯花をまかきにつへて雨の夜も月見かほなるをり里人
 小町 八七五 一家集山城の小野の山の里遠みかりの宿をも鳥ぞ鳴なる
 是則 八七六 炭かまに薪よりたく夕暮ほをのけけふさとの山人
 小大右 八七七 小野山に煙たえぬ炭竈を室のやしと思ひける哉
 元真 八七八 炭かまの早あくらん小野山に煙の高く立のほる哉
 西行 八七九 四方山の冬のけしきに成まよに小野の炭かま煙立ます
 同 八八〇 寸まの浦に塩やく善の煙かみそまかたるをの炭竈
 同 八八一 粟小倉もとのふれ田にまくつむと誰かはせん菅の小笠を
 慈円 八八二 寸木こるをの山へは霧あて炭み車運まよとへ
 俊成 八八三 春はれと雪ふる年のなほ深みをの炭かまけりやく覽
 時秀 八八四 小野山に朝たつ鹿も声たてて秋の夜はしのほりけり
 家隆 八八五 堀後降雪もそやめくと小野山の椎葉かるほしほかりや
 同 八八六 小野山のならひとむればあなしけり雪より先に冬木うつむ
 同 八八七 拾目もあはぬ草の庵にいとしく霰ふりなりをの山里
 為家 八八八 おほかたはごせは冬ほこみしけれ思ひしりねやをの炭かま
 清輔 八八九 夕立の露吹はらふ松風に夏さへはる小野の山かけ
 14+ 八九〇 詠藻烟たつ小野の炭かま雪のみて富士の高根の心ち社すれ
 八九一 折六真柴かる小野の細道跡絶てふかくも冬の成にける哉

公朝
 季經
 公実
 鷹司
 家長
 宮内
 能宣
 基俊
 永録
 隆源
 紀伊
 河内
 頭仲
 肥後
 常陸
 大進
 頭仲
 仲実
 慈鎮
 同
 俊成
 為家

八九二 月漬比の小野の里人いとまみ煮て煙山にたなひく

八九三 蕨草小野がやく炭空竈の烟にそ冬立ぬとは空にみえける

八九四 同 夢かとも里の名のみや残りらん雪も跡なきもの浅芽生

八九五 玉吟時過て小野の浅芽生立烟しりぬや今は思ひやるとは

八九六 御集さるに又うすき衣に月冴て冬をやくふるもの炭やき

岡崎

山城 兼雄

八九七 万十一 とも崎のおほみあしらを人な道ひそ有つとも若かきまさん
よき道にせん

八九八 散木 秋萩を心にかけて岡崎のあふみあしちまなつみてそ行

岡屋

同 和名三年治郡

八九九 秋葉 しのしみ過ぬまかの屋に猫とまきて日野まで行て駒心みん

九〇〇 夫木 日くれなは岡の屋にこそしのみなれ明て渡らんひつ川の橋

小鞍嶺

大和 類孝

九〇一 万十一 白雲の龍田の山の滝の上のそくらの嶺に吹をせる

梅の花は山高み風しやまぬは春雨のつきてし
ふればはつえにはちり過にけり

九〇二 新古 しら雲の春はかすねて立田山をくらの峯に花匂ふらし

小蟹田

吉川 摂津 類孝

九〇三 万十 をはたこの板田の橋のこほははけたよりゆかんとは吾妹

九〇四 統古 をはたこの宮の古道いならん絶にし後は夢のうき橋

九〇五 壱百 夜はくらし妹はに志しをはたこの板田橋をいふまなし

後景極

走家

同

家隆

後鳥羽

無名

俊頼

西行

誠人

九〇六 同 けたふちて音むしにけりをはたの板田の沼に渡す棚橋

九〇七 夫木 君かあたり小蟹河のななくもかなけたより行ん橋もあやつし

忍照宮

摂津

九〇八 万廿 櫻花今盛なり難波の海をしても宮にささしめすなへ

小篠原

同 名寄テリ

九〇九 古来 五月雨におなの河岸水こえとをさか原やいつく成覽

九一〇 正治 昔しなが鳥ぬなの海に船とめて小篠原に風を待みん

音無山

伊勢 兼雄

九一一 十五音 音無の山時鳥いつよりか夏に鳴とは人にしられし

九一二 名寄 松やあらぬ風や昔の風ならぬいつれの秋か音無の山

九一三 六帖 音無しの山の下行きしら水あななき我も思ふ心あり

九一四 家集 音無の山より出る水なれやふほつかなくも流行かな

九一五 夫木 音となしの山にやけしは鶯の声あつししく人のさく覽

九一六 同 音なしの山にこそゆけ呼子鳥よとほなまかすへしやは
忍穂井 同 類孝

九一七 風雅 音しほめをけし若水に汲初て御め手向る春はさけり

九一八 同 世をへて汲ともつぎし又方のあめより移すをし井の水

九一九 夫木 君か代に濁りものらしたかくしや麓にすめるをしほの水

九二〇 神道 行末も百万代の春かけて我とむすはん忍穂井の水

鳴呼浦

伊勢 八雲御抄

九二一 万一 音みの浦に船葉すらん乙女んか玉のすそに塩みつらんか

九二二 名寄 音みの浜日影になひきよる塩のひかたも遠く春風を吹

九二三 基俊 音みの浦に船葉すらん乙女んか玉のすそに塩みつらんか

仲実

経正

家持

俊奇

隆房

顕昭

長明

伊勢

信明

花山院

相模

家行

延誠

仲房

兼郡

人丸

伊平

人丸

伊平

伊平

伊平

伊平

伊平

伊平

九三三 夫木みるめはす茨のまきこ白妙に日影もなびくもみの浦風

頼徳院

小笠原

甲斐 類考

仲実

小野古江

同 類考

貴之

九四一 堀百さか原すくろにやくる下草になつてす荒を鷹ふちのま

頭伸

九四一 六帖伊勢の海の小野の湊の流江のながれも見ん人の心を

七俊

九四二 同 小笠原へみの御牧のはれ駒いとけしき春は荒ます

貴之

九二五 名かけら山の小野の古江にす塩の湊やいつ春の夕暮

人丸

九四三 表集都きてなつてひくは小笠原へみの御牧の駒にそ有ける

俊成

九三六 同 御被する小野の湊の松にこそ幾代久しとと少かりける

光俊

九四四 夫木小笠原やけの薄つゆのめはすくろつまがむかひの黒駒

不説人

九二七 同 塩むかし小野の湊の流江に猶漕がねて泊る伊勢舟

頼阿

小崎沼 池

武蔵 八雲御抄

不説人

九二八 草庵伊勢の海やとの古江をほろくと湊をわけてすめる月影

頼阿

小崎沼 池

武蔵 八雲御抄

不説人

音聞山

尾張 薄塩

枯孝

九四六 万九前玉のをさききの沼に鴨をばぬきもものか身に

無名

九二九 夫木ととまきの山の麓や近からんあはての杜にめひかたき哉

上総

九四七 千香山鳥のをさきき池の秋の月さてや鏡をかけてすむ覽見

急尹

九三〇 声はかり音聞山の時鳥すかたゆかしき物にそ有ける

源順

小山田関

同 夫木吉田

不説人

小鹿原

駿河 薄塩

鷹司

九四八 夫木逢事を苗代水にまかせてそくさんこころは小山田の関

不説人

九三一 表集時しもあれきしかの原を秋階けはあまるとまへそ恋渡るる

源順

小山田関

同 夫木吉田

不説人

九三二 類聚行人も袖やぬらしん妻恋る小鹿の原の秋の白露

鷹司

九四八 夫木逢事を苗代水にまかせてそくさんこころは小山田の関

不説人

岡部 里森

同 類考

無名

岡部原

同 薄塩

好忠

九三三 万十郭公来鳴とよます岡へなる藤浪みれば君はこしとや

長明

九四九 名寄むさし野の岡へ原の秋秋も花咲時に成にける哉

好忠

九三四 類聚嵐吹岡への里の有明に影も入寒き雁の友こゑ

中務

音信山

上総 薄塩

重保

九三五 新六身のうさの又友もなびきたくひかか岡への里の松の一本

定円

九五〇 夫木郭公尋きたれば今こそ音信山のかみに鳴なれ

不説人

九三六 同 はりす岡部の杜の木間よりくも待ける夕つくよ哉

為相

九五二 同 さたりとやまといれ山の時鳥かたらふ声はうはの空にて

不説人

九三七 夫木藤がきつたの下道分越て岡へかきつるつ山の木

隆教

小筑波

常陸 薄塩

無名

九三八 同 夕日すすけしきもさひし松たてる岡への里は山陰にして

頼阿

小筑波

常陸 薄塩

無名

九三九 同 白妙の波もしつけき色みえて岡部の里に咲る卯花

頼阿

小筑波

常陸 薄塩

無名

九四〇 草庵入日子す岡への里をとり捨て雲の多るる峯やこさまし

頼阿

小筑波

常陸 薄塩

無名

九五三 同 小筑波のぬちにつくしめひに夜はさはたりぬを又ねてむかも

頼阿

小筑波

常陸 薄塩

無名

九五四 同 さつはしけき木間立鳥のめゆかなをみんごねさるに 同 九六八 同 あまくたる日吉の神の験とやをひえの杉の木高から覽 通基

男神 同 万葉正書見たり

九五五 万丸の神もゆるし給へりめの神もほひ給ひて時となく 大伴卿 九六九 散木 紅葉せしきまの里の恋しきに時雨てのみも明暮了哉 俊頼

九五六 同 もの神に雲立のほり時雨ふりぬれとらる共我帰しめや 虫丸

小野御牧 同 類考

九五七 新千ひたなる小野の御牧の露草のうつしは駒のまくにそ有りける 朝光 九七〇 名寄 仮初に見しはかりなる曙鷹のまよの橋を恋や渡覧 衣笠

岡田原 同 類考

九五八 続 後東路に春やきぬらんあふみなる岡田の原に若な摘けり 惠慶 九七一 家集 君が行ところとまきは月みつをほすて山ぞ恋しかるき 貫之

九五九 夫木 見渡は尾花かたまたまき波や岡田の原に秋風ぞ吹 行家 九七二 出巻 来くまなき月の光を詠れほまほすての山ぞ恋しき 西行

音高山 同 類考

九六〇 家集 吹風は枝もなほらして年代とよほし声のみ音たがの山 俊成 九七三 同 天雲のはるく御空の月影にうしみなくさむ懐捨の山 同

九六一 続 千よはしなる音高山の樹葉の色にかけらぬ君か御代かな 匡彦 九七四 拾玉 我心にくさめかね吾妹子かまは捨山の月影らねとも 同

小野 山 同 藤座 山城は左河名

九六二 名寄 浮身世に色替り行浅茅生の小野のかりねの袖ぞ露けき 中務 九七五 同 をは捨の山より出る月をみて今さししに袖のぬれぬる 同

小野の宿にとまり侍て 東のかたへまかりけるに近江の小野と云所にて

九六三 名寄 志つこいも夢かとおとろしは馴ぬ旅ねの小野の山風 雅經 九七六 同 懐捨の山も尋し卯花の垣ねよりこそ月は出けれ 同

九六四 新 拾跡たるく神代もへは太比叡やとみえの杉にやがる白雲 成運 九七七 同 年もへぬ我思ひしれ秋の月影行末もほすての山 同

九六五 拾玉 玉ひえの山をひえの杉の山かき色も浮世の外の験ならすや 慈円 九七八 同 思ひいりて詠むる夜はの月影は都の空も懐捨の山 同

小比叡 山 同 滋賀郡

近江 滋賀郡

九六六 同 我國を守るは神のしるしかな小比叡の杉や三輪の山本 同 九八〇 同 我庵ほほすて山の麓かほなくさめかたき秋の月影 同

九六七 夫木 大ひえやをひえの山も秋くは遠れは見えす霧の籬に 好忠 九八一 同 詠 葉かくはかり心晴ける月影を懐捨山とほ思ひけん 同

九六八 同 さつはしけき木間立鳥のめゆかなをみんごねさるに 同 九八二 同 清我庵ほほすて山に住のへて都の跡を月やもるらん 同

九六九 散木 紅葉せしきまの里の恋しきに時雨てのみも明暮了哉 同 九八三 同 をほすての山は心のうちをれやたのぬね宿の月を詠て 同

九七〇 名寄 仮初に見しはかりなる曙鷹のまよの橋を恋や渡覧 同 九八四 同 さらしや懐捨山のうす霞かすめる月に秋ぞ残れる 同

九七一 家集 君が行ところとまきは月みつをほすて山ぞ恋しかるき 同 九八五 同 思草 更級はむかしの月の光かほた秋風をほすての山 同

九七二 出巻 来くまなき月の光を詠れほまほすての山ぞ恋しき 同 九八六 同 なくさすついでれの山も住なれし宿をほ捨の月み旅ねは 同

小山里 同 藤座

尾総橋 美濃 藤座

懐捨山 信濃 更級郡

音高山 同 類考

小野 山 同 藤座 山城は左河名

小野の宿にとまり侍て 東のかたへまかりけるに近江の小野と云所にて

小比叡 山 同 滋賀郡

近江 滋賀郡

小野御牧 同 類考

岡田原 同 類考

音高山 同 類考

小新田山

上野 藻塩

九八七 懐中しらとほしをにぬた山のもる山の浦かせなく言葉にもやめ

小河橋

陸奥 類考

九八一 物名造くしより髪までくれとつともなしたらのを川の橋のみせある

九八九 懐中陸奥の小河の橋のあゆみ板の若しむかは我もむかかん

緒絶橋

同

九九〇 藤袴を抹背山深き道をは尋ずてとたえの橋にのみまよひける

九九一 六百番思はずにたえの橋と成ぬれは徹しれず志波を哉

九九二 連保百東路の緒絶の橋も有物といかにも行袖とかは見る

九九三 同 相坂をけし越ぬとも陸奥の緒絶の橋の末の百波

九九四 同 東路や雲路へたて聞しかともたえの橋は身にも有りり

九九五 同 しりざりき志形見に陸奥の緒絶の橋のうき名はかりを

九九六 同 志すは又ふみん陸奥のまたえの橋の年しりぬとも

九九七 同 忘らるる浮身の為の名もつし緒絶の橋の秋の夕暮

九九八 建保りてそく人ももつけ玉の緒のまたえの橋は浮名せけり

九九九 愚草しるへんき緒絶の橋に行きよひ又今更の物や思はん

〇〇一 玉吟あふ事はぬるを頼みの夢路にて緒絶の橋に月更行

〇〇二 夫木行末をたえの橋は聞もうし思ひの道のおくもしりて

〇〇三 同 思ひのみ東にりしてかく駒の緒絶の橋に草まとはん

〇〇四 同 山馬のまたえの橋に鏡かけ清き夜渡る秋の月影

雄嶋 浦磯

陸奥

〇〇六 番袖をいさよあしきの曇といざりせんほすぬ類に思ひける哉

〇〇五 堤百あなし吹きしまが磯の浜千鳥光りつ波に立ちほく也

〇〇六 名奇塩風に雄嶋の梅花かけて浪のみたてもなかく散ぬる

〇〇七 拾玉松嶋やましまの曇に馴てたに情はし秋の夕くれ

〇〇八 詠藻袖ぬらすましまが磯の泪かな松風来み時雨降かなり

〇〇九 愚草誰もまた夜深き風に松嶋やましまの千鳥声恨らん

〇一〇 玉吟帰雁をしまの曇を恨てものか翅も藻塩たる覧

〇一一 建保百松嶋やましまの磯の曇の袖いくとせ波にしほりきぬらん

〇一二 松嶋やましまの曇の曇のすて衣思ひすつれとぬる袖哉

〇一三 同 くれはまたかと思はん松嶋や雄嶋のあまの夜の思を

〇一四 天木たれ差に秋風ふが松嶋やましまの波に帰る雁全

〇一五 同 散ぬへも雄嶋が磯の紅葉にあらくもよする沖つ浪哉

〇一六 同 行雁の余波をしまのうらみても袖はほたる春の曇入

〇一七 同 興つ風や冬からし松嶋やましまの浦に千鳥鳴也

〇一八 同 あまの袖いかにはしあへて松嶋やましまが磯に衣打覽

〇一九 同 海士人は袖とも分すしほる覽雄嶋が磯に五月雨の比

〇二〇 夫木夏もまたましまが磯のうら枕流ぬる波に秋風をたつ

〇二一 新葉果松嶋やましまの波にともはん立帰へき時もありやと

小黒河

陸奥

〇二二 教集もくる崎あすきとたえのみをつくだても姿にりぬとは見よ

〇二三 玉吟小黒河みつごしまの夕霧に欄無小船行ふしすも

〇二四 新六都にともなからん小黒河みつごしまの夕霧に欄無小船行ふしすも

〇二五 夫木心ありて鳴にはあらし小黒河みつごしまの夕霧に欄無小船行ふしすも

〇二六 同 小黒河みつごしまの夕霧に欄無小船行ふしすも

〇二七 同 小黒河沼のゆねはしみしたき月もゆるしみに蛙かき也

俊頼

仲正

慈円

俊成

定教

家隆

定衡

忠定

康光

猷円

忠兼

行嚴

季友

家長

俊鳥羽

復鳥羽

志御門

俊頼

家隆

行教

弁内侍

茂人

不知

俊頼

〇二八 同 さくら崎沼のぬねはくろしきよにのよにけりも心なりけり

光俊

〇四二 五百首生るまをの嶋の波の上に浦風をよぶ日くしゆの声

保季

抑閑 池

同 兼盛

仲正

〇四四 二月清和田の原隠岐の小嶋の松風はうのふる若をあらう白浪

兼盛

〇二九 夫木雲路にもまへへの関のあらませはやすくは雁の帰しよしまし

不誠

〇四六 愚草安ひさしむけのかたみか友千鳥と渡りすつまの島の小嶋に

為家

〇三〇 同 辨にきて恋もつきぬいとも行人をさへへの関もすへ前

同

〇四七 夫木朝またきたまの島のはなれ若も極満くし見えず成行

為家

〇三一 同 思へとも人めをむ涙こそ抑の池となりぬいなれ

同

〇四八 百首我まは新嶋守と隠岐の海のあま浪風心してよけ

後賢

小塩浦

加賀 兼盛

陸頼

〇四九 同 さきの海をひとりやきぬるこ夜千鳥鳴音にまかひ松風

同

加賀へ下けるにまじはの浦と云所にて

陸頼

〇三二 良玉思ひきやをしほの善の宮屋にてね覚に秋の月を見んとは

陸頼

〇五〇 百首野へそむる雁の法は色もなし物思ひ露のまきの里には

後賢

雄神河

越中 仙覚抄

家持

〇五一 百首浪間わけまきの涙に入舟の我そかかる絶ぬおもひに

後賢

〇三三 万七をみ河紅には山乙女し産附とると瀬たふすしし

俊頼

〇五二 同 春くれは苗代水もまがすとも小田の里へいとかりけり

嘉言

〇三四 名寄さかみ河ぬしろたかやふみしたまこむる芋つきもせはか為とそ

同

〇五三 同 金葉松風のまきの里に通少にぞ治れぬせの若け聞ゆる

敦光

〇三五 散木雄神河うきにはゆるまくのうれをふみながへてもせこみたぬそ

俊頼

〇五四 夫木今け又もよふたあしもよとにさく玉のまきの里の松風

頼氏

〇三六 散木をかみりやさのはるえに結つりてのそふもぞめぬそね思へは

俊頼

〇五五 同 月とに見大けれは

西行

手布崎 浦

越中 仙覚抄

家持

〇五六 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

〇三七 万七をみ崎花ちりまかひ者はあし鴨はささされぬみ

家持

〇五七 同 月とに見大けれは

西行

〇三八 同 十八を山の崎滑たもほりみぬもすりもあへも浦にあしなぐに

同

〇五八 同 月とに見大けれは

西行

〇三九 同 もろかにや我は思ひしも山の浦の有磯のめぐりみれともかぬも

福丸

〇五九 同 月とに見大けれは

西行

〇四〇 同 十九手布の浦に震たふ引たる帷の藤浪もきて瑛まよ

無名

〇六〇 同 月とに見大けれは

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六一 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六二 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六三 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六四 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六五 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六六 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六七 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六八 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇六九 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇七〇 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

隠岐小嶋

隠岐

経表

〇七一 女集をば梅は信濃がらねといづくにも月すむむ嶺の名に社有けり

西行

緒捨山

同

- 五二 万七 年つもるもすての山の榎の葉も久しくぬはば吾生にはり
- 五八 名 奇誰やまた空に緒捨の山ならん 榎の葉分て月の御舟は
- 五九 愚草 榎の葉の深き緒捨の山に生る苔の下まで猫や恨ん
- 六〇 玉 吟夕涼み我袖かくる 榎小船をすての山の榎の下風
- 六一 新 六 みずひさに成せしに行る緒捨山榎も苔木の苔深き迄
- 六二 夫 木 風 さやまをすての山の夕立にけけならちる 榎の下露
- 六三 同 白玉の緒捨の山の秋の露つらぬく 草も今や枯らん

小江浦

同 葦垣

- 六四 正 着 直 きの 國 やま 江の 浦 川の 友 十 鳥 ゆ む け けて 社 声 は 聞 ぬ り

音無滝 川里

紀伊 類多

- 六五 大 怖 君 ふ と 入 し れ ね は や 紀 國 の 音 無 川 の 音 だ にも せ ぬ
- 六六 夕 暮 卷 朝 夕 になくぬをたるとの山は絶ぬ波や音なしの滝
- 六七 名 舟 熊 野 なる 音 無 川 に 渡 マ は や マ や マ の 橋 忍 び く に
- 六八 同 音 無 の 里 の 秋 風 夜 を 来 み 忍 び に 人 や 衣 う つ し ん
- 六九 夫 木 は ら く と さ か し き 嶺 を 分 過 て 音 無 河 を り 山 び つ づ 哉
- 七〇 同 音 無 の 滝 の 白 玉 と ち は せ て も 仰 る 聲 の 涙 に や かる
- 七一 同 も の 山 の 上 より 落 る 滝 の 名 の 音 無 に り ぬ ぬ 袖 哉
- 七二 同 い か に し て い か に よ る し ん の 山 の 上 より 落 ぶ 音 無 の 滝
- 七三 同 う ま 事 の し は し 聞 え ぬ 時 や あ る と 今 音 無 の 里 と 尋 ん
- 七四 同 氷 み ら ぬ つ と い ふ 水 は と ち つ れ と 冬 は い つ も 音 無 の 里

碓駟盧嶋 山

交路 名 奇 三 阿 利

師光

人丸 内大匠 定家 家隆 為家 鎌倉

- 七五 明 玉 海 原 に も の こ う 嶋 の あ ら は け けて 我 皇 の 御 世 と 久 し き
- 七六 名 奇 と ぼ た だ の こ ろ 山 に を り ま して 神 そ 父 母 國 を つ り ぬ け
- 織面漆 筑前 葦垣
- 七七 夫 木 あ ぐ ら や も の 湊 に あ び ます る た ま の あ せ し ば あ び ます ぬ け 行 り
- 小沼田 未勘
- 七八 万 三 小 沼 田 の あ ゆ む の 水 を 除 け る 人 は く む て ぶ 時 し
- くそ入のむてふくむ人あまなまかことのむ入の
- 小嶋神 同

経家 26+

- 七九 万 七 雲 かくれをしまの神のかしくはめはへた(と)も心へた(な)
- 八〇 名 奇 朝 だ ま だ ま の か の 野 へ の つ ほ 重 摘 へ き 程 に 成 に ける 哉
- 岡野 未勘
- 小山田池 同

経衡

27+

- 八二 万 十 四 七 や ま の 池 の 塘 に さ す 柳 折 り も ば ら す り び と 山 たり ば も
- 尾崎隈 同

親宗 羽尻 大官院

- 八三 名 奇 野 へ の 草 ま た あ せ し と や 片 岡 の か ま の 隈 に 雉 子 鳴 ら ん
- 別雷神 山城 葦垣 上 賀 茂 也 云

六條

不知 為森 和泉 26+

- 八四 徒 拾 千 早 振 け い か つ も の 神 も あ れ ば お ち ま り に ける 天 下 か な
- 若宮 同 葦垣
- 八五 名 奇 数 なら 我 身 は 山 け り ぬ 男 山 老 せ ぬ 宮 も 家 か げ ば ん

重保 後賢極

27

忘水 大和 類多 横津有同名

- 〇八二 新後昔見しふるく沢の忘水何今更に思ひ出しん
- 〇八七 名青別ぬるあしたの原の忘水行方ししぬ我ころ哉
- 〇八八 散木五月雨のふるから小野の忘水みみ消えにて渡る瀬もなし
- 〇八九 新葉我身よふる野の沢の忘水思出なむに若むもそぞ摘

若草山 同 藻塩

- 〇九〇 名奇今も猫草やこもれる春日野の若草山に鴛鴦や鳴
- 〇九二 夫木春日野の若草山にたつ雉のけさの羽音にめも寛しぬる
- 〇九三 千首下も夫の若草山の雪とけにせれも見え行谷の埋木

和豆香山 大和 藻塩

- 〇九三 万ニ白妙に合人装束てわつか山御したてして
- えかたのめめしけれぬれこひまうひびつらばけとも
- 女んすへもなし

〇九四 同 我夫天しられんと思はねはよほにぞみけつわつか山

忘水 横津

- 〇九五 詞花住吉の浅沢小野の忘水たえくならてあふしもなまき
- 〇九六 統子さくらぬたに浅沢小野の忘水忘はてとも幾日ぬくん
- 〇九七 統後五月雨に浅沢小野の名のみして深くなり行忘水哉
- 〇九八 夫木暮の色や浅沢もの忘水たえく霞む住吉の松

輪田御崎 入江浦 同 類多

- 〇九二 六百番しつえまでかゝれる薙は紅葉して錦をはるはわたの笠松

〇二〇 名奇塩風はらるふの松に音信てわた入江に残る月影 寛性

- 〇二〇 名奇車舟わたの御崎をかみめぐりうしよまもけて塩や引らん
- 〇二二 同 名にしおほししら輪田の御鳥心てしの方ほふとも
- 〇二三 同 名にしおほししら輪田の御崎も有物をかけたりふる身をいねん
- 〇二四 山家葉消ぬへき法の光のともし火をかくるわたの御崎せけり
- 〇二五 新六和田の原御崎漕き山釣舟のほるかにけは心すみけり
- 〇二六 夫木照月にみほの験のあらはれてやすらひもせぬわたの舟
- 〇二七 同 湊河きき出てきけは郭公輪田の御崎の松に鳴なり
- 〇二八 同 秋風の吹くる嶺のむし雨にさして宿るわたの笠松

中務 為尹 渡辺 横津

- 〇二九 堀百五月雨は日数つもれとわたの大江の岸はひたしりけり
- 〇三〇 夫木渡辺や大江の岸に水越てこやのきは舟つなく也
- 〇三一 統拾わたのや大江の岸に宿りして雲ぬにみゆる伊駒山哉
- 〇三二 万ニわたらひのいづの宮に神風にいしきまとはし天雲き
- 〇三三 百十三渡会の大野河への若くぬきわれひさにあらは妹恋んかも
- 〇三四 家集玉くしけ三見の浦に住養のわたら草はみゆるなりけり
- 〇三五 玉吟なかせのためしにひかん鈴鹿河越ていつきの渡会しめ
- 〇三六 夫木流出てみめとたれますみつきは宮川よりやわたらひのしめ
- 〇三七 同 石にかくわたりあひ川ながら思ひ心のあせすも有かな
- 〇三八 巖代へぬ差に秋風わたらひの郡の内に宮居せしより

大持 渡会 川野 伊勢 類多

- 〇三九 大妹にひ若の松原み渡せば塩子の鶏にたつ鳴わたる

同 若松原 伊勢 類多 紀伊 同名

- 〇四〇 大妹にひ若の松原み渡せば塩子の鶏にたつ鳴わたる

香経 天理 皇武

- 〇四一 大妹にひ若の松原み渡せば塩子の鶏にたつ鳴わたる

二〇 統古伊勢鳴やわかの松原見渡せば多盛かけて秋風そしく
 二一 風雅伊勢鳴やしほひのわたの朝なきに霞はまほし若の松原
 二二 新古唐しれは若の松原埋れて垣千の田麴の若々来けき

志井

同 類考

仁元元年 文前官群行の時志井と云所にて
 二三 千載わかれ行都のかたの念しきにいす猶ひみん志井の水
 二四 夫木涼しきに月もすみけり若概よみく夏も志井の水

若磯

遠江 名寄三ツリ

二五 名寄駒かよひ浜名の橋の浦風に音信かはす若いぞの松
 志河 甲斐 夫木ニ吉岡
 二六 夫木忘河またやわすれぬ誘事の忘られすのみおもほゆる哉
 二七 同 うさ人の忘はてなて忘川何とて絶す恋渡らん

和乎可鶏山

相模 倉御抄并仙覚抄ニ吉岡

二八 万十四足かりのわさかけ山の木のわさかけマねむつさすとも
 我立杣 近江 類考

二九 十五百君か代をわさ立杣に斬きて檜原福原色もかはらす
 三〇 拾玉うまの管我立杣のひしりをもほくむ神の末々嬉しき
 三一 同 昔より我法の師の立杣やつさぬ厚かき猫研る覧
 三二 同 山ぎきんにあらすやいかにかりにても我立杣はあまたらしは
 三三 同 しがにせん我立杣はほりれきて求る道の木とほらけき
 三四 同 月清年へに我立杣の杉村にいふ秋風の若々としん

本明 秋鳥羽 雅永

一三二 同 風なして若かとしんを嬉しけれ我たつ杣の梧のしるしに
 一三三 愚草跡ふかき我立杣に杉ふりて詠めすしきにほの湖
 一三四 玉吟山四み我立杣にたてきし瑠璃のよほは雲々とまなし
 一三五 夫木いかはかり我立杣の郭公むかしおもへほねのなかる覧
 一三六 同 かめのおのみとりの洞に連ふ覧我たつ杣の光は

甲斐 忠定

一四〇 同 かしは原我立杣にちきりけり杉のしるし今こそほきけ
 一四一 同 たのちしな固をせりとちかひて我立杣のぬねの太寺
 一四二 夫木思ひみや大津のかねの浦つたひ我立杣にならん物とは
 一四三 草庵山人のるにたへし昔こそ我立杣のけしめ成けれ

若松森

近江 類考

長明 忠岑 心隆

一四四 塚後百間にマ入添しく成ぬわか松の社の風のしるしへに
 一四五 千載皇の末うせゆへさしるしには木高くそなる若松の杜
 一四六 夫木ニ妻なる若松の森年をへて神さひんきて君はまませ

童部浦

同 名寄三ツリ

一四七 名寄ふいし嶋しまる神やいま下覧波もさほねわはへの浦
 はへの浦と入海のまかさまをロすさひて
 一四八 海においしまといふすさまにむかひてわし

鷺山

同

一四九 拾玉わしの山音のみさし嶺なるを移すひしり跡の有ける
 一五〇 同 鷺の山深き心に思ひやれはけしんも昔も在明の月
 一五一 同 鷺の山我山にうつる月影を鶴の林に何あしむけん
 一五二 同 わしの山雲らね影を思ひ出て我立杣の月もみる哉
 一五三 同 鷺の山退凡下葉の平都婆まで跡ある跡を見る嬉しき

同 定春 赤陸 為家

同 為家

同 為家

同 頭仲 永靴 匡房

同 柴武部

同 同 同 同

二〇二 同

ありとたに人びしてれぬ忘水たえての後も袖は沾けり

儀子

一八三 同 思ふはしかれはとまる年月の六十にあまる若の浦人

同

我身浦

同

眞嘉陽

354

一八二 同 若の浦の浪に年ふる誘へもりの浮木にけふとあひぬる

同

二〇六 名 奇いねにせんわが身の浦のうせ見むがき世は思ふ物から

未勘

一八一 同 若の浦の入江に朽しあめ草ことし初めてよにひかれぬる

尤俊

一八〇 同 若の浦の浦や夜はかなくすさふ若の浦に衣をかけよ住吉の波

徳宗極

一九〇 志 草たこちぬの心もしれば若の浦や夜深き鶴の声を悲しき

定表

一九二 同 夜の鶴鳴ぬふりにし秋の霜ひとりもほさぬ若の浦人

同

一九三 玉 吟 若の浦やたつは波の跡をたに興をふかめて見し人をなき

家隆

一九四 同 夫木なしつほの昔の跡に立帰り若の浦にて波のよろろへ

家長

一九五 同 ためしなき松の烟にこもはん時しむいかば若の浦人

為家

一九六 同 わかの浦の神にかきやるもしほ草心にひやく手向とも成

家隆

一九七 同 若の浦やなきたる朝の女をつしくもらねかひなきをたに残す

定家

松葉名所和歌集第三巻

忘水

未勘

347

一九七 六 音 音すひり浅茅が下の忘水こほりし程はしとれざりしも

香煙

一九八 拾 玉 をかねとも扇も露も忘水野茨の庵の夏の夕暮

慈鎮

一九九 同 ぞまくれ鴨立茨の忘水おもひ出とも袖はぬれびん

同

二〇〇 同 夕陽暮野茨に夏を忘水けし秋ちかく飛登がが

同

二〇一 月 清月影のゆすれすやとる忘水野茨に誰か秋を契し

後家極

二〇二 玉 吟 うき人の中より出る忘水末やみづの川と成らん

家隆

二〇三 夫 木 苗代にこそ引捨し忘水猶せきかぐる春の小山田

仲正

二〇四 同 草陰の夏野に漆も忘水絶間あればや思ひ出つ

為家

357

松葉名所和歌集第四 加

賀茂河

山城 愛宕郡

- 二〇八 万士がも川の後瀬しけみ後もあは人林には我よむなすも
- 二〇九 須磨谷みきつれて葵かさしそのかみも思はつしけものつみかき
- 二一〇 春集はがにも思ひかけてはゆ山たすきかも河波立まらしやは
- 二一一 ありきみに引つれてそぞ早探かもの河波打渡りけれ
- 二一二 同 千早探知茂の祭もかくらよりいとまきてもおもほゆる哉
- 二一三 同 ちはやんるかもあふも祈りつかさして君も頼ける哉
- 二一四 同 姫、松みれともあがすゆふがけて加茂の祭にもひやつかまし
- 二一五 同 神もたにいりも聞は打つれて立帰らなんかも河波
- 二一六 日晝流ての世のたあしとてかた／＼のつひ立くらかも川波
- 二一七 同 葵草秋の宮へかけへて長閑に渡るかも河水
- 二一八 六百番ちはやんるかもみあれの葵草ひきつきても渡る今日哉
- 二一九 同 雲よりたつる使に葵草いしせかけつ加茂の川波
- 二二〇 拾 玉葵草かさしにせざる其日こそ加茂の河原もやせしかりけれ
- 二二一 同 年をへてかものみあれに葵草かけてぞ思ひ世の契えを
- 二二二 同 年をへて葵はものみあれ草かけてぞ神のしるしも見る
- 二二三 同 年をへて葵はものみあれ草かけてぞ神のしるしも見る
- 二二四 同 年をへてたのめはかも川波かけて嬉しきも桂かな
- 二二五 新六 加茂河の後瀬しつけみさてさして鮎ゆす淵をぬるやたおるぞ
- 二二六 同 道のかもの河原を臥拜みふる木のあふも陰もなれにき
- 二二七 月清わか祈る心の木をしれとて竹林に遠も賀茂の川かせ
- 二二八 恋半夏はる扇に露も置初て御被深しも加茂の河風
- 二二九 夫木今の代もひかりしそみも葵草まうりにせざるものつみひは

人丸 深唄 貫之 信実 同 忠見 中務 有家 家隆 寂達 女房 慈鎮 同 同 同 同 為家 信実 後家極 足家 為家

賀茂山

同

- 二三〇 名寄かも山やいくとる人をみつかきの久しき代より哀かく覧
- 二三一 月清賀茂山の麓のしほのうす緑心の色も神さびにけり
- 二三二 同 神山 同 賀茂篇
- 二三三 万十 神山の山下とよみ行水の水尾絶すは後も我ま
- 二三四 堀川が山のけふのしるしの葵草心にめぐるかさせけり
- 二三五 同 神山のその葵をくさりつけ山のみあれにかさしつる哉
- 二三六 同 神山のしるしと思へはけふこは葵のかつてせぬ人そなき
- 二三七 堀後 神山の桂をふらば月のうらに我思ふ事ならせらめやは
- 二三八 同 いはけなきそ神山に別にし我だらもめの道をしはや
- 二三九 詠藻身にしめしそのかみ山の桜花雪降ぬれとかほしきけり
- 二四〇 玉吟ちはやふるその神山のゆふたすきかけて頼みし程は過にき
- 二四一 同 立帰れその神山の桜花此春よも若にあひ見ん
- 二四二 夫木 鶯の音ははらねと神山に春をつくるほうれしかりけり
- 二四三 同 神山のはその紅葉いもしるく我思ふことも照す成へし
- 二四四 同 神山の若根のひはら霜さえて梢もしるく年ふりにけり
- 二四五 同 神山の若根のひはら霜さえて梢もしるく年ふりにけり
- 二四六 同 をのかみ思ひくく神山のこのてかしほを手にとせとる
- 二四七 同 神山のこのてかしほも取かきし卯月になれは若もそ祈れ
- 二四八 同 神山におよぶ松の千世とは若かためしやのり置けん
- 二四九 山妻まなみかきちかちあはせにからにけりわかたをかのつる頼みん
- 二五〇 拾 玉かた岡やかもみたりし水清み心のすむはまかせてぞ行

定家 後家極 無名 公実 仲史 隆源 常陸 慈鎮 同 俊成 家隆 同 信実 高達 俊成 行意 和泉 式部 光明寺 入道 俊成 西行 慈鎮

二五二 類 聚野へ草またあさしとやかた岡の小篠原黒雄子鳴なり

二五三 草履御被し幾度かけつ逢事は猶かた岡の杜のしめ縄

二五三 折六片岡の木隠過る御手洗河音涼しややめの空

二五四 同 陰をのみえしき代より類かなわむ片岡のまつ村

二五五 夫木かた岡やいさか原の葵草けりぬかさしては誰かおこん

二五六 同 夕されは松風涼しがた岡の松の木末に蟬はなげとも

二五七 御葉片岡の杜の木枯えく〜て幸もほる夜半の白雪

二五八 同 片岡の森の木陰に立ぬれてま〜とししぬ時鳥哉

二五九 夫木秋かけて杜の時雨や降ぬらんわが片岡の紅葉にけり

二六〇 同 片岡の森の桐を出るより御手洗河に月せさやけり

祇園

山城 類ま

二六一 玉葉もはやる神のぞのなる姫小松万代ふきはしめせけり

二六二 拾玉みな月やたえぬ祭の馬長にいとせはやる神の園生は

二六三 夫木かた岡の尾のながき日に神のぞのせげふ祭る覽

二六四 十首山よりもなたに上る鳥羽に神のぞのふはば春にけり

柏森 社

同 名奇テリ

二六五 新六しめのゆき紫野ひらかへの社はかへすはからつつれにけり

二六六 家集かけしめみ頼むかひありて露霜に色ははりせぬかへの社の

龜山

同

二六七 六帖龜山をふらうつして行水に漕ぐる船は幾代へぬらん

二七八 家集かめ山のほほはうへり紅葉はほらして秋をまかまふなる

二八九 同 行かへり程さへ遠きぬめ日かならよの松ひく龜の尾の山

藤道

類阿

衣笠

知春

祐拳

忠走

後鳥羽

同

東方

小笠原

經衛

慈鎮

為家

為尹

為家

為家

貫之

貫之

貫之

能宣

忠見

二七〇 同 ひくくに千世をめぐとも龜山に残る樹のおもほゆる哉

二七一 山家集万代のためしにひかん龜山のすその原に茂る小松を

二七二 拾玉龜山の草より出る月影は君かよはひきてくすせけり

二七三 夫木かめ山のつ子日の松は君かためほかに千年のためしやは引

二七四 同 龜山のつ子日の小松ひきつ〜も君か為にち祈りける哉

二七五 同 龜山や大内山を見渡せば山たふに吹くとも雪かも

二七六 同 龜の尾のなきつ若根にすむむり上りたる玉は千代の数かも

二七七 同 四海おさまれるまは音に聞龜のお山も波そ〜す哉見

二七八 同 大井河をせきにせせる龜山の命のかきりあひみてし哉

二七九 夫木龜山の若根の松にすむ鶴は君か千代へんたふせけり

二八〇 同 君代は龜の尾山にすむ鶴の毛衣さへや千世を重ぬん

二八一 同 いはかりえしかるらんかめ山のふもとの松にまほするさ草

河合

山城 兼盛 七瀬子内

二八二 名奇そのかみか思ひせ出る河合の波にこそある冬のみ月

二八三 山家集河合やまきのすそ山石たてり袖入いかに涼しからん

二八四 夫木川あひや清き河原に麻のはのぬき取してらさ御被せん

二八五 同 五月雨は河合せきや水越て清くすま〜ん神の心も

笠取山

同 類ま 山階屠

二八六 帖かきくもり雨降ともまたしくぬかさ取山にまほはるかな

二八七 同 雨降に道ほまともぬ山科の笠取山やいつ〜なるらん

二八八 六百番雨ふれとかぞ取山の鹿の音は中〜よその袖ぬらしけり

二八九 堀百打かつ笠取山の雪にはたもとせぬる〜人なとかあせ

二九〇 山家集まさきわらひたのた〜みや出ぬ笠取村雨過ぬ笠取の山

同

西行

慈鎮

為家

兼盛

俊成

為家

俊成

不知

内侍

同

為家

為綱

西行

為家

高松院

貫之

法師

李経

匡房

西行

二九二 拾玉 五月雨のひまじりければ時鳥笠取山をさしてなくせ

二九三 雨ぞくくしるしそ空にあらはるゝ笠取山の清滝の宮

二九四 夫木さして行かざ取山の郭公よみは爰に雨やとりせよ

二九五 同 たりありは一村雨に立よしん笠取山の嶺の松陰

二九六 良玉五月雨に笠取山は越ゆめし花色衣かへりもせする

鴨羽河

同 類ま

二九七 さかほる鴨の羽川のそのかみも思はへ又し代々のみつかき

霞谷

山城 類ま 陸奥有同名

二九八 古今草ふき霞の谷に影かくし照日の暮しけしはあらぬ

二九九 玉吟思ひやる昔の下こそ悲しけれ霞の谷の春の夕くれ

三〇〇 夫木葦深き霞の谷はくもる登馬の必やむかし恋しし

桂 河渡里山

同

三〇一 松風春月のすむ河うもちなる里には桂のかけはのしけける歌見

三〇二 黍集かつし川月の光に水まさり秋の夜ふかく成にける哉

三〇三 大首會桂河たりもやしぬ橋舟かな比瀬の必や船こさはしる

三〇四 堀百桂川照月影の宿る夜は深に住虫や底にみえける

三〇五 思草又方のかつしの里の小夜衣ありは月の色にうつせ

三〇六 名奇ししわも桂渡りと聞かにはかの祭の葵とくせん

三〇七 類聚望月の駒引たてふやしけん夏やかつみ渡り成覽

三〇八 夫木青柳のあらる里の深緑道のたふち春風と吹

三〇九 同 桂川河やみ柳波おけく梅津ははやく春めきにけり

三〇一〇 同 みあれなく時は来にけりけふもか桂の山は栗取しん

蕨 鎮

三〇二 同 桂河七瀬の波のつかひ舟下しはてす明ぬ此は

同

三〇三 同 月を見く光をのみや頼むく桂の里に松虫はなく

基 俊

三〇四 同 照月みかたら里の郭公あが明行雲に鳴なり

令 泉

三〇五 同 御集くもみや朝夕霧に晴すも桂の里の秋の月影

大 木

三〇六 同 いごにわか世はへん久方の桂の里の月のよなく

大 木

三〇七 同 首暮行はやめてみゆるやみかつこへ瀬のほるかよりも覽

桂宮

同

前 太 政 大臣

三〇八 同 古今秋くれし月桂のみやははる光も花ともすはかりを

唐橋

山城 蒸 塩

三〇九 同 懐中浮世には行ぢれん世中にむかしはしのふ人も有やと

兼 秀

三一〇 同 藤生野のたからほしめはやしといはひし時にあへるかも

兼 秀

三一〇 同 玉吟おもかけにむもそ心ぬ藤生の形原の在明の月

兼 秀

三一〇 同 夫木ふちふち形原の女郎花色めくてももけしこもなる

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

三一〇 同 かの埋む雪に心まかすれば形原に雉子なくせ

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

兼 秀

鹿背山

同

三七二 万六山代のせ山のまに宮柱ふとしきたて高しらす

三三二 同 乙ヤラうみまかくてふかせの山時のゆけは都と成ぬ

三三九 同 かせの山木立をしけみ朝さす未鳴もよまず驚鳥声

三三〇 題 林泉河渡らぬさきの夕立に袖もほしあへす衣かせ山

三三二 夫木泉河あたり来けき秋風に礎の音のころもかせ山

三三二 同 二つみ川河渡しうく吹風に夕涼しまかせ山

三三二 御集杖たててけふみかの原風来しや七夕に衣かせ山

三三二 名寄柳出てあこえくれは風ませに雪降むか衣かせ山

三三二 同 河なみのたちあふ坂の時鳥かせ山よりや鳴ててつ見

三三六 折葉合きても川風寒しむかの原立や霞の衣かせ山

可尔波多井

山城

名寄歌也も同

三七二 万廿ますしおと思へる物をたもほきてかにはのたぬに芥そ摘ける

紙屋河

同

名寄歌也も同

三三八 六帖かりじてもわがと思へは紙屋河せりの千鳥のたれしは鳴

三三九 柳おうは玉のわが黒髪やかはる見鏡のかけにふれる白雪

三四〇 御集もててもみやみ川にたえぬ涙絶て忘るまなく時がし

神楽岡

同

吉田中丸をとり

三四二 新ちふりたててはらうしはほし聞ゆなる神楽の岡や鈴虫の声

三四二 名寄君が代をいなる祈のかくら岡猫も千年の色やせし見

三四三 夫木神楽岡吹まふ風のつてことしにふりすきゆる鈴虫の声

三四四 同 吉田野のさねにもまつはあはれ笑まに〜つ〜み〜かくら岡哉

三四五 十首程もあまき吉田の岩のかくと岡さて松風の声しほりつ

不番

同

同

雅永

内侍

少侍

羽鳥

羽鳥

雅心

雅経

長規

令婦

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

鏡山

同 葦垣

三四二 長歌八隅しるわか大君のかしみや御はつつかへし山科の

鏡の山に夜はもよの盡ひるほもひの盡ひるの文を

なきつありて百敷の大宮人はゆきまわかれなむ

葛野里

山城 夫木二吉国

三四七 夫木旅人のゆきもみえすなりけりかとの里の今朝の朝霧

春日 山野嶺里 大和

三四二 万三もはやふる神の社しなりせば春日の野へに粟まかましも

三四九 同 春日野に粟よけりせば待んかにつきてゆかましも社ほしるをも

三五〇 同 春霞おすかの里に植子水葱苗なりと云しえはこしにけん

三五二 同 春日野に朝なる雲のしくくに我は恋ます月日に日に

三五三 同 春日山霞たひ引心く照れる月夜に独りもねん

三五四 同 春日山霞たひ照る此月は妹か庭にもさやけかりけり

三五五 同 春日野に咲たる萩は片枝はまたふありこと絶絶こそ

三五六 同 春日山やま高がらう岩の上のすか根見んに月待かねぬ

三五七 同 霜雪もまた過ねほもほすは春日の里に梅の花みつ

三五八 同 霞たつ春日の雲の梅の花山下風にのりこすなゆめ

三五九 同 霞たつ春日の里の梅の花はかたはんと我思はなくに

三六〇 同 けさの朝け全閑つ春日山紅葉にけし我心いたし

三六一 同 雨隠心ゆかしみ出見れば春日の山は色つきにけり

三六二 同 爰にありて春日いつあまさはり出てゆかねは恋つともる

三六三 同 昨日こそ年は暮しは春霞春日の山にや立にけり

三六四 同 冬過て春は来ぬらし朝日さす春日の山に霞たな引

額田王

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

三六二同	鶯の春なるし春日山霞たな引夜目にみれとも	同	三九二同	春日の野守と身をまわしてか待らん春まわ物とみん	信明
三六六同	見渡は春日の野へに霞たら咲はへはは桜花かも	同	三九二同	今さしに老の杖に春日野の入りわくる若たつむか	中務
三六七同	春日野に煙たつみゆ乙女らし春野の尾萩採てにししも	同	三九二同	春日野に春日の小松ひまわつて神に祈る若か千年を	永録
三六八同	春日野の浅茅かよに思ふとも遊ゆけふは忘れぬやも	同	三九二同	堀白消残る雪間と分て春日野にうめとたぬ若なをと摘	永録
三六九同	十春霞立春日野を行かへり我はあれみんいや年のはに	無名	三九二同	春立てけしは春日のうわかなはまどと葉成ける	肥後
三七〇同	春日野にぬる鶯鳴わかれ帰ります程思ひますすわれ	人丸	三九二同	春日山おなじみの宿なればわけて藤の花咲にける	顯仲
三七二同	見渡は春日の野へに立霞みまくのほしき若か姿を	無名	三九二同	堀後春毎にけし初らる春日山松のさかもやまさりけり	同
三七二同	雨はりの雲たたくて時鳥春日をさしてゆ鳴渡る	同	三九二同	ささしきの初なれや春日山嶺ともむまでいたくま	俊頼
三七三同	春日野の藤は散行て何さかも御侍の人折てかさん	同	三九二同	まつらる神の御前の乙女子か花も匂とく春日山かな	忠房
三七四同	春日野の萩しもりな朝こらの風になくひて差にせりこ	同	三九二同	山葉集春日野は年の内には雪つめて春は若なの生るせり	西行
三七五同	夕立の雨降毎に春日野の尾花か上の白露おもほゆ	同	四〇二同	拾玉おもはん思は袖に露ふかしそ春日野の梅鹿の声	慈鎮
三七六同	長月の時雨の雨にぬれ通り春日の山は色付にけり	同	四〇二同	詠藻かけていはいとひもすしん春日山ざりしていか類まざる	俊成
三七七同	雁金の寒き朝けの露あくし春日の山ともみたす物は	同	四〇二同	春日山万代よはふ松風に鹿も秋をほしるば有らん	同
三七八同	物思ふとしのみにとりてけふみれば春日の山は色付にけり	同	四〇三同	君が代は春日の嶺の朝日影行末遠き春の空かな	下野
三七九同	十二春日野に照れる夕日のおよそに女君をのみみて今そくやし	同			
三八〇同	春日野に浅茅しめゆひ絶めやとわか思ふはいや遠はかに	同			
三八二同	朝日さす春日の小野に置露のけぬき我身おしりくもなし	同			
三八二同	春日野の浅茅が原にもくれぬて時やともなし我こしりくは	同			
三八三同	家集雁金の鳴にしよりそ春日はる三笠の山は色付にけり	同			
三八四同	春日のうらみあはほ面影に見えて妹忘れぬかな	同			
三八五同	人は我は春日のしの薄したはしりくも思ひみたる	同			
三八六同	春日野の若なも若も初らん誰ために摘春はしなくに	同			
三八七同	せんくの年つみくれば春日野に生る若なはふせりけり	同			
三八八同	ひく松の千年の春はすすかの若もまん物にやはあしぬ	同			
三九二同	やまとおも霞もしもに今日しそ春日の野へに立渡ららし	同			
			葛城山 神 大和		
			四〇二同	十春柳かつてき山に立雲の立てもみても妹をしぞ思	人丸
			四〇五同	かたさのそつちまゆみあし木にも頼めや若か我若つけけん	同
			四〇六同	六帖葛城や渡すくわらの継橋の心もしらすいで渡らん	同
			四〇七同	家集かつてやくめの継橋つさくも渡しもはてしからざる神	不知
			四〇八同	葛城やくめの継橋ならなくに渡しはやすしくめのかげもに	清正
			四〇九同	秋たては見しとや思ふ葛城の神のよるにてやみぬかき哉	同
			四一〇同	こころ君かつての神よりも絶間は我そ渡しわつらふ	中務
			四一一同	絶間なく渡すましか葛城の神のしりくそ我たのままし	同
			四一二同	堀後かつてきや木陰にひかる稲妻は山伏のつゝ火かこそそみれ	兼昌

四三六 百卷葛城や夜の契はむなしきに物思ふ橋はなとやとたえぬ

頭昭 四三六 同 神名備の山下とよみ行水に蛙鳴也杖といはんとや

同

四二二 建保浅みとり糸よりかくる青柳の葛城山の春雨の空

唯成せ 四二二 同 神名ひを打まふさきの石測に隠れてのみや我志としん

人丸

四一五 建保嶺高き雲に桜の花やちる嵐そかほる葛城の山

知象 四一五 同 神名ひを打まふさきの石測に隠れてのみや我志としん

同

四一四 同 乙女子がつしき山の山桜霞にもれし面影そたつ

範宗 四一四 同 神名ひの御軍の山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

無名

四一七 同 さは炬のかつらき山の玉かつし霞みたれてびく春かせ

行意 四一七 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

無名

四一八 同 葛城やたえずたなびく白雲とたえは橋にきとさりけり

陸彦 四一八 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

兼盛

四二九 名寄がつかまやくらの各の村霞とたえは橋にきとさりけり

陸彦 四二九 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

兼盛

四二〇 拾玉 我身そぞくしかねぬれ葛城やあくなる谷も浮せせけり

慈鎮 四二〇 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

隆信

四二二 同 かつらぎの神の心を思ふが明行空やわみしがるしん

同 四二二 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

隆信

四二二 同 葛城や外山の紅葉さかり也峯の庵には散やしぬ野見

同 四二二 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

隆信

四三三 山家葛城や正木の色は秋ににてよその梢のみとりなる哉

西行 四三三 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

隆信

四二四 名寄がつかまやくらの各の村霞とたえは橋にきとさりけり

尤明 四二四 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

隆信

四二五 同 白雲はよとにも見えす葛城や高天の月は嵐吹也

疾陸 四二五 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

行象

四二六 月 清葛城の火の白雲はほる也高天の山の花盛かも

後衣彦 四二六 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

行象

四二七 同 しもゆふかつらき山のいかならん都も雪はまなく時なし

同 四二七 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

慈鎮

四二八 愚草青柳の葛城山の永日は空もみとりにあせふ山とゆふ

走象 四二八 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

永陸

四二九 御集さゆり葉の葛城山の嶺の月晩かけて影ぞ涼しき

後鳥 四二九 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

永陸

神名備 神社里川 大和 根津丹波佛中三有同名

片岡 山野 大和 類ま

四三〇 万三 諸の神なひ山に五百枚さししに生たるとかの木の

赤人 四三〇 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

無名

四三二 同 六只しは行て見てしが神なひの瀬はあさみて瀬に成らん

大伴御 四三二 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

伊世

四三三 同 七 清き瀬に千鳥妻よふ山の端に霞立しん神なひの里

無名 四三三 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

元具

四三三 同 八 蛙なかくみなひ河にかけみえて今や咲らむ山吹の花

厚見 四三三 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

永縁

四三四 同 九 神なひの神より板にする杉の思ひも過す志のしけさに

人丸 四三四 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

中務

四三五 同 十 なたびにして妻恋すしし時鳥神なひ山に小夜更て鳴

無名 四三五 同 神名ひの山に隠れたる杉し過人や苔のむすまて

慈鎮

四九二 拾玉 春を経て片岡山のさわりは折しれとてや萌はしめけん

四八〇 同 御狩する片岡山のむし柴にふるかりけるけふの歌は

四六二 同 雉子鳴かた岡山の明ほの草のささしを問人もかな

四六二 夫木 採ゆへ片岡山にもなる身も思ひしとけは哀おやなし

四六三 同 道のへの片岡山の梅の花立よるはかり春風そぶく

四六四 同 片岳はなもこのぬ梢よりみとりかこなる松の下柴

四六五 同 宿しむる片岡山のあさも原露にたふく月をみる哉

柏木森 大和 類考

四六六 六帖 柏木の森の下草 年ふとも光をいづか見んと類みし

四六七 藤川 かくくす日教もしす柏木のもりて久しき五月雨の比

四六八 名舟 駒もまたすめぬ物を柏木の杜の下草にけりらん

四六九 同 柏木の森のあたりをふり捨て御笠の山に我はまにけり

四七〇 新六 三笠山跡ふみたえて柏木めつしからぬ杜のこの木

四七二 玉吟 雪ふれば葉守の神や帰ららん白ゆふの柏木の森

四七三 大木 春ふかくゆはたむむ紫の藤味かたる柏木の杜

四七三 御集 秋風はうは葉にさむし柏木の森のあたりに在明の月

四七四 千首 松檜原うれもまじしぬ柏木の杜の梢を雪にまじさ

軽嶋 豊明宮 同 八雲御抄三当国

四七五 新六 かがり山のおりの宮の昔より作り初てしから人の池

神辺山 同 八雲御抄三当国

四七六 万九 歌 吹つもの吹へり山にたらし向ひかまきの山に秋萩の妻を

まかんと朝つくも明く惜み足引の山の山考とよみよひたも鳥も

慈鎮

同

同

長明

定範

後紫極

慈鎮

人丸

為足

迦留 市社地 入江 大和 類考

四七二 万 天飛やかるの道をはわきも子に里にしめればねもころに

四七二 同 かる市に我立聞は玉たすさうぬひの山にけく鳥の

四七二 万 三 かるの池の入江にあくる鴨すしも玉藻の上は独ねなくに

四八二 同 十一 天飛やかるの杜のいはひつき幾せまてあらんもり(ま)ども

四八一 六百 大和路やかるの市女に事問ん逢に(つ)さまいかかふへき

四八二 古来 鴨のたつ羽音寒けしがるの池の上の堤人やすく覽

四八三 名舟 月さゆゆ夜半はさびから氷おて冬のけしきをかるの池水

四八四 夫木 輕の池の入江をあくる鴨とりうは毛はたにむける朝霜

四八五 千首 夕闇にこぼに螢のみたるは月に尤せかかるのいけ水

神垣山 同 類考

四八六 後撰 千早振神かき山の神は時雨に色もめはらさりけり

四八七 玉吟 もはやふる神垣山も越ぬへし古郷人をこふるあまりに

四八八 同 ちはやふる神垣山も越ん且や物思ふこひのきり成(き)

蜻蛉小野 同 類考

四八九 新後 知れしを霞にこめてかける山の小野の若草下にもゆしも

四九〇 新拾 雲かふる夕日は空にかけろ山のものをあさちふ風そ涼しき

四九二 大木 蜻蛉の小野のふる江をこす塩の漆やいつ春の夕なき

四九三 同 過ぎつる里もほるかに鳴鳥のかけろ山の小野のしづめの空

四九四 草庵 もとたてはやふけにけりかけろ山のものを秋つ初風の初風

人丸

同

同

紀重女

人丸

香經

尊海

香景

頭輔

為尹

不説人

家隆

同

為春

覺蒼

光俊

知家

妙光寺

頌阿

笠山 大和 藻塩

154

四九二 万三雨山れはさくんと思へる望の山人にさすなねれはひつとも

石上

借香山

同 八雲御抄

四九六 万十雁金の声まくらににあすよりはかりか山は紅葉せめりん

形小野 岡

同 類考

四九七 万十五み吉野のかたむ岡のかるかやの思ひみたれてぬるよしそなき

四九八 壩百み吉野の形の小野の女郎花たはれて露に心をかろな

四九九 夫木たくなき形の野へう女郎花心とめぬ人はあらしな

五〇〇 同 露結ぶ形の小野の女郎花玉をかされる朝ほらけ哉

五〇一 同 みれとあかぬ形の小野の女郎花とめればとれ秋は過とも

唐人池

同 兼塩

五〇二 新六がる嶋のあかりの宮の昔より作り初てしかり人の池

檀原

同

五〇三 万ナ歌 玉たすさうねひの山のかし原のひしりの御代にあれば

ましし神のあしはすむの木のいやつきくに

五〇四 同 せかし原のうねひの宮に宮柱ふとしまてて天の下

五〇五 現六秋かけて露露やはせめろ玉たすさうねひの山の峯のかしほら

五〇六 名奇天地の神代はしすかし原の宮のそ園のはしめせける

五〇七 夫木せひ川にやうつものこはやくそにへせぬけかしほの宮

垣津田池

大和

五〇八 万十三 かみけのひかろみせそこの長月の時雨のふれば雁金も

いまたきりか神南備のまよき三田屋のかき
つたの池の堤のもつたす三千の楓枝に水枝
さす秋のよみち葉まきけもち 下略

交野 原里渡

河内 類考

五〇九 六百雉子鳴かたの原の鳥立こそまこと雁の宿りせけれ

五〇一〇 同 げふも交野の女のみみせれしてはく間もなき狩衣哉

五〇一一 壩百御狩する交野の野への鈴虫はひびく声かふりたて鳴

五〇一二 同 みかりすと槿のま葉もふみしたき交野の里に今日もくしつ

五〇一三 同 日影さす豊の明の御狩すも交野の小野にけふも暮しつ

五〇一四 同 やかたふの鷹手はすへて朝たては交野の原に雉子鳴也

五〇一五 同 とや帰るたはれの鷹を手にすへて雉子鳴るかたのへそ行

五〇一六 同 後御狩人もくなら行鈴の音も交野の雉子いかに聞見

五〇一七 同 みかりする交野の女のみ今朝行はひつ松根に雉子鳴也

五〇一八 同 あふことのかた野の雉子志志にむはろくと立ち鳴見

五〇一九 同 建保色わかぬ入日の影も峯さえて交野の里は初雪の時雨つ

五〇二〇 同 仲山がりのかたのまはむしにたまはつとへなる初雪の空

五〇二一 同 狩人のかたのふゆき打払ひ豊の明にあはんとやす

五〇二二 同 御狩するかた野のまは風寒てうす雪しうし道のさ原

五〇二三 同 うつり行としもふく降雪に交野の鳥立草も残しす

五〇二四 同 御狩せしかたの冬やつらからん春の山路に雉子鳴也

五〇二五 同 拾玉思ひあへす袖を沾ぬるかり衣かたの御野の暮方の空

五〇二六 同 玉吟雪をうすかたの御狩朝あめは隠もやらぬ雉子鳴也

五〇二七 同 狩ゆけは交野の霰さえぬまの玉の緒たえず雉子鳴なり

五〇二八 同 桜かり交野の雉子妻こみて鳴やうつら山花の下草

経象

同

国信

師頼

師時

基俊

永縁

紀伊

仲実

常陸

走象

明德院

走象

知家

康光

秋阿

慈鎮

慈鎮

表陸

同

五三〇 名寄いさつる日なみの御狩雪がし支野のものを冬の曙

五二九 詠藻又も徳人に見せばや御狩する支野の雪の明はの

五二八 聖葉忘れや支野の御狩かり暮れ帰るみなせの山端の月

五二七 月清けり兼ぬあすも狩ん支野原枯野の下に雉子鳴也

五二六 愚草狩衣はく山袂をとるまでかたの原に雪は降きぬ

五二五 夫木支野なるなよの雉子のひもよにもひとつかひにはあらしと思

五二四 かり初にみてしたちも立忍び支野の雉子りしは打なり

五二三 同 ふけぬともこよひ帰らんあひ思ふ人はかたう渡り成らん

五二二 御葉思ふにも衣成へきとたかひ支野の原のゆきさくれの空

五二一 同 宿かせん入もた野のさこのはに深山もさやと驟降せ

片足羽河

河内 藻塩

五四〇 長れしなるやかたあすは河のさねぬりの大橋の上に紅の

赤裳敷十ひき山あぬもてすれるさぬきてた

ひとりわたす児は若草の葉かあららんたしのみの

独かぬしんとはまよくほしきわきもか家のしもなく

しなてるやとあるによりてわざと片岡川と

よめるにや心しとす

河田森

河内 城近江 河内 磯部郡河田桑原間野

五四二 夫木ス方のとけき空をけきみれば河田の社は霞さけけり

同 (つめかほはたふ原に摘せりもたか為にて) 袖ぬくす見

亀井 摂津 類考

定春

俊成

家長

後景極

定家

匡衡

如願

後鳥羽

同

五四二 山葉葉浅からぬ契の程そくまればるかめ井の水に影うつしつ

五四一 拾玉古のつらうはやしに月のある光は亀井にぞすむ

五四〇 同 つれとて鶴の林にくたく身の底の心は亀井にぞしる

五四七 同 身を分て鶴のはやしを出しより亀井にうつる有明の月

五四八 同 未のよゝ亀井まですむ影にぞせらるくしける光はほしる

五四九 愚草諸人のむす山葉は忘るなよ亀井の水にうつはへぬとも

五五〇 夫木不代も御法のながれたえしとや亀井の水のまよくすむらん

神南備森

同

山崎より神なひの杜送送り人へまかりて帰

りかてに別おしぬけるに

五五二 古今やりの道はらなくに大方はいさうしといひていさ帰りなん

宇治関白有馬の湯見ばまかりける道にて

情秋歌詠侍るに

五五三 新初神なひの杜のあたりには宿はわれ暮行秋もさぞ留らん

五五二 同 下葉まて心のまに染てけり時雨はあけり神なひのもり

五五四 名寄立田野の錦を染たてし梢にさす神南備の杜

神崎

同 藻塩

五五五 藻塩かみ崎のあり磯も見えず波たぬぬつこより行人まき道はらし

河嶋 摂津 類考

五五六 竹晚の夢に見えつ川嶋の磯す波のしきてふもほゆ

五五七 名寄桑入江興つ塩風さむきは川嶋がれ子鳥鳴なり

五五八 草葉とつらみ枕はかりも河嶋の水の心はなほぞしらぬ

五五九 現六もせむから哀とせ思ふ川嶋の草のほかにみゆるなてし

西行

慈鎮

同

同

同

定家

俊成

源さね

長春

西園寺

季経

藤原

頃阿

五六〇 名 寺秋の夜の光もよく河嶋の水のなかに宿る月影
 五六二 新葉徒に枕はかりを川嶋のよそのあふせるばやなれん
 五六二 大夫河嶋の鼻砂に下つるしく鶴のしもの翅に年ふりお覽
 河尻 撰津 名寺二当国

師前内大臣はりまへまかりけるともにて河尻
 と出ると詠る

五六三 詞花思ひ出ぬまき郷の山はれとわかれ行はたあはれ成けり
 五六四 兼葉淡のみよほはしりうななれはよしなからへはゆかしてと思
 五六五 遊歌 川尻に舟のへともみゆるかな
 しほのほるとてそはくはらうらん

柏野 伊賀 名寺二当国

五六六 名 寺なり山のこつてかしのふるの市うるもつらぬも君かまに

風森 同 或末勅 夫木当国

五六七 大夫うらなしな風の柱なる桜花とそあたる色に咲とも
 神道山 伊勢 類名

五六八 四行記 神ち山見しめにも花盛はいはかりうれしかららん
 五六九 名 寺いす河せの水を尋ねれば神道山にかるしし雲
 五七〇 同 神ち山したる若根の宮柱契たかへお御代とこぞまけ
 五七二 拾玉かけまもかけて頼むゆふたすき神道の山の行末の寺
 五七二 同 身にしめて君もぞ思ふ神道山百枝の松の千世の風に
 五七三 同 神道山百枝の松のしきかけしきには君を守りける哉
 五七四 同 神ち山つみみ月月のゆふたすきかけて久しき君か御代哉
 五七五 同 あはれのみためしはそれと神ち山みゆらん物を面影の空

公雄 五六二 同 頼むらん心の空にくまもあらし照せ神ちの山のはの月
 妙光寺 五六七 同 月影のさしも神ちの山のへにすむかひなれやけゆの内居は
 知永 五六八 同 神ち山君か手向と松かえに重てなみく雲のしほゆふ
 五七二 愚草照すらん神ちの山の朝日影天の雲を長閑なれとは
 五八〇 玉吟 神道山雲をほるかに出る日のく千代君に影をならへん
 五八二 同 神ち山あふけはとてすか河せうろにへ渡る物かは

大江 五六三 御葉つとせぬ都のせらに吹かよへ神ちの山の千世の初風
 俊頼 五六三 同 神ち山あふく心のふかきともいはて思へは色にみゆるん
 俊重 五六四 大夫 谷を出て心たかくせうつるなる神ちの山の落鳥の声
 五八二 同 露時雨もりにけらしん神ち山木の下紅葉色かはり行
 五八二 十首さうに今若年の昔思ひ出や神ちの山の曙のせら

鳥崎 伊勢
 五八七 山藁集かすす崎の波のこしと思ふかな白ましましらすか嶋の黒

按察 同 名寺二当国
 五八二 名 寺この春は花をおしまてよとてらん心を風の宮にまかせて
 鏡宮 伊勢 類名

越前 五八二 統拾神代より光をとめて朝熊のかみみの宮にすめる月影
 季能 意鎮 甲斐河 同 名寺二アテリ
 五九〇 名 寺いぢはひかこしけり津嶋よりかみ河行はいつみの原
 同 河口 同 類名
 五九二 百六 河口の野へに庵て衣のふれは妹か袂におもはゆるかも
 神主 五九二 大川川の関のあら垣守れともいて我ぬるしのひく

西行 西行
 西行 西行

隆舟 隆舟
 隆舟 隆舟

長明 長明
 長明 長明

大辨 大辨
 大辨 大辨

左大臣 左大臣
 左大臣 左大臣

神主 神主
 神主 神主

神主 神主
 神主 神主

五九二 同 川口の関の荒垣いかなればよる通ひをゆるさこららん

五九四 兼基 浅き名をいひなかしける河口の関はいかこらし関のあら垣

五九五 堀百守人もまた絶なくに河口の関のくまぬきはや朽にけり

五九六 草薙葉かくてのみ隔やはてん河口の関のあら垣もらぬよまなし

五九七 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

五九八 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

五九九 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇〇 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇一 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇二 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇三 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇四 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇五 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇六 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇七 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇八 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇九 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇〇 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇一 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇二 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇三 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇四 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇五 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇六 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇七 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇八 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇九 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

六〇〇 同 名奇秋をやく神崎山は色消て風の末に海士の藻塩火

同

隆源

傾阿

長明

真人

縁法師

行春

光俊

仲正

後丸

頭季

清輔

後味

有春

長明

風早浦

駿河

藻塩

六〇二 子五わか故に妹なけくらし風早の浦の沖へに霧立ちたぐ

六〇三 同 風早の三ほの浦わの白つしみれともさし無人思へは

六〇四 新六絶すのみもしは焼て風早のみほの浦わに畑たつ也

六〇五 現六小夜千鳥波や高けん風はやの浦の沖すに立居鳴なり

六〇六 表葉かひかねのまつに年ふる君故に我ははけさど成ぬへら也

六〇七 同 かひかねの山里みれば芦田鶴の命をもたる人そ住ける

六〇八 堀百春霞立渡りつかひかねのさやにもみえぬ朝よまき哉

六〇九 名奇月清みかひの白根を詠むはいつは雪に空は晴ける

六〇〇 同 雪消ぬ甲斐の白根も越行はふみよしの春の曙

六〇一 九月清いはりさすかひのしらねの旅枕よすから雪をほらみかねつ

六〇二 愚草思ふともこふとも何のかひかねよまほりふせる山を隔て

六〇三 玉吟をしなへて山も雪はもれ共甲斐の白根はふかひもなし

六〇四 夫木甲斐の根は山すかたも埋れて雪のなかせにかる白雲

六〇五 同 春のくる霞をみればかひかねのねわたしにそたな引にけれ

六〇六 同 かひかねに咲にけらし足曳の山なし岡の山なしの花

六〇七 御集雪しろくかひの白根のさの庵やとれる袖に宿る月影

六〇八 十首雲や今うつまさるしむかひかねのさやにみゆる曙の空

六〇九 新なるかまくらし山のこたかきをまよとながはく恋つこやあらん

六〇〇 堀百 鎌倉やみとしか葉高に雪消てみなのせ川に水までも也

六〇一 同 我ひとりかまくらし山を越行はほし月夜とくうれしかりけれ

無名

河内

信実

為家

貫之

同

師時

俊忠

同

後京極

走家

各隆

明徳院

信実

能因

法師

後鳥羽

為尹

無名

頭仲

常陸

六三〇 拾玉なめけ行心のいろせ深からんかまくし山の春の花その
 六三二 名貴氏も文にもほびにけり秋の田をかきてみむる鎌倉の里
 六三三 夫木かこもりなとや昔せぬ時鳥かまほし山に道やまほし
 六三三 同 志草しつむはかり成にけりあともとめぬ鎌倉の山
 六三四 同 むかしにも立こぞまさされ氏との烟にまけぬ鎌倉の里
 六三五 同 とせあまりいつとせまでも住割て猶忘れぬ鎌倉の里

片瀬河

同 藻塩

六三二 表葉浦をかましくみか原に駒とあて片瀬川の塩のみぞ待
 六三三 藻塩帰来て又見ん事もかたせり濁れる水のすまねせはれは
 六三八 夫木打渡すも塩の片瀬河思ひしよりほあさき水哉

霞関 崎

武蔵 類考

六三九 類聚はるかなる霞の崎も思ふが波の花もて立さほく覧
 六四〇 表葉やすしはて越ける春の便とや霞の関の名にも立らん
 六四二 拾玉叫子鳥霞関に声すなり過行人も立とまれとや
 六四二 同 東には霞を関の名にたて春くる道もへりけまし
 六四三 名貴暮ねとも春の名残を忍へとや関に霞の名もとむ覧
 六四四 夫木立とまる霞関の明ほの花もくへか匂ひせふらん
 六四四 同 心あてにせれかもしとみる梅花霞関の春のたくれ
 六四六 草葉集東路や春の越くる相坂の山は霞の関と社みれ
 六四七 表葉春くる行みはいつくしらね共空に霞の関やすへまし

蝦手山

武蔵 藻塩

六四八 懐中 色かへてぬままたあると来てみれば秋の下葉を紅葉しける

慈鎮 237

笠嶋

同 仙覚抄二当国

実方 六四九 才一草陰のめら乃の崎のぞき嶋をみつか山路越覧見
 公任 六五〇 夫木秋の夜あら乃の崎の笠嶋にしし出月草陰もやし
 基政 限山 上総 藻塩
 中務 六五二 懐中 我たためらうき事みえは世中に合はきりの山にへんん

形見汝

同 八葉抄

長明 六五二 夫木ひしほのなぐさむやとてあ山道はせやかたみの姿にかもねん
 為相 六五三 才一 大舟のかとり海にかりあろしかなる人か物思はさらん
 六五四 名貴 放衣いし花にたらかへてけしはかりの浦に來にけり
 六五五 新葉 明ぬるかはや影うすし夏衣かとり浦の短夜の月

人丸

葛飾

下総 仙覚抄五巻葛飾郡

定家 六五二 才三 我もみつへんかつかまのてこなかと奥柳とさう
 慈鎮 六五七 同 葛飾のまの八江に打むく玉もかりけん手子をしして思山
 同 六五八 同 かつかのまの手児奈か麻衣に青山すまてみたさぞ
 頭氏 六五九 才九 葛飾のまの井みれば立なし水を汲りてこほしそ思ふ
 院山 六六〇 同 十四かまのつてこなままこかと我によすし山まうてこほる
 光経 六六二 同 かつかのまのつてこなまありしかはまのこほり液もとろに
 同 六六二 同 鳥鳥のかつかねをにへすともその悲しきととにたてあや
 同 六六三 同 拾玉かつかや法の道にぞ渡しける昔思ひしものつき橋
 同 六六四 同 現六かつかのまの井つのかけはかりさお思ひの跡をこひつ
 同 六六五 同 夫木葛飾の川せみ柳咲しより液より通ふまの経橋
 同 六六六 同 葛飾のうしまの松のうしつけに見初し人の恋しきやなせ

道信 237

道信

長明 237

七二 霞合しやや火と空にまかへても霞の崎のあまの藻塩火
 七二 名昔春なれば霞の浦に立出て浪の花をやあまのみるらん
 七二 同 春くれば花の都をもめても猫霞の里に心をせや
 七二 同 昨日までさえし気色も引かへてあくる霞の山を長閑き
 七二 愚半春霞がすみの浦を行船よそにもみえぬ人を恋つ
 七二 夫木春のくる霞の里はいつかも垣ぬの梅も花咲たけり
 七二 同 ちる花の霞の浦に波よるも春行香のまよりやみん
 七二 同 さは姫は塩やくあまといつ成て霞を浦の名には立覧
 七二 同 照もせず曇もほてぬざり火や霞の浦のしよや成らん
 七二 夫木春たては霞の浦のあま人は採見もやまつひろふしん
 七二 同 春霞がすみの浦も見渡せば海士のせやもめてける哉

桂鳩 帝陸 藻塩

七二 名奇 秋の夜塩ひの月がむと落山まつく海のなかな道

近江

七二 才ニ やすみし我夫君の大御舟まもち恋なんしがの辛崎
 七二 同 十五あめつともを袴かたし辛あはは又婦みん心置の辛崎
 七二 十五白雪ふればしかのめし崎浦さえて水のうへによする白浪
 七二 堀百近江の海みちくる塩もむき物と誰かの崎といひ初けん
 七二 拾玉蹴をかしはしなりの夜ほの月ふかき契としかの辛崎
 七二 同 唐の人にせはやかも崎にぞ液するしかけしきも
 七二 同 頼むてよその辛崎に立液のたえず心にかるはかりと
 七二 月清辛崎や春のさ波打解て霞なるしかの山風
 七二 同 あせも遠のち山に出る日の水をかみかくしかの辛崎
 七二 玉吟から崎や大宮への御船まつ汀も遠く水しけり

知表

七二三 名奇さ波やしかの辛崎御幸して大宮へふむよそひする
 七二 新六たかくなき身こそ思は悲しけれもどたくる辛崎の松
 七二 夫木めつらしやよま辛崎の茨ひさしえしくぬおもどろかれつ
 七二 同 辛崎のまひせしは時鳥神に手向て初音啼也
 七二 同 辛崎の松の一本を宿りにて外山に通山郭公哉
 七二 同 辛崎に舟やきんしたのむれてくつ浦伝ひする
 七二 同 辛崎にめつらしきかな白妙のまきこに立るから崎の松
 七二 同 辛崎せほり吹行松風に汀の田鶴も遠さかるなり
 七二 夫木には海を出て山月のまよひのまにけは西なる辛崎の松
 七二 同 幾千代のしるし成らんけふまの神の御幸の辛崎の松
 七二 同 辛崎の松の梢に船のほせしるしもみせし三輪の神杉

鏡山

近江

類字 野洲郡 山城 豊前 同 名

七四二 妻我妹がふみの山の紅葉ふうつる時にぞ物はおなじき
 七四二 同 くしける鏡の山を越ゆけはわれし恋し妹か嫁か
 七四二 同 名にしふは雲とざりけり鏡山むへそ夏影はみえり
 七四二 同 見ん見んや有けん鏡山行末遠き豊のあかりは
 七四二 同 鏡山やまひこたかくよはなるせのゆへに影ぞみゆらし
 七四二 同 雪ふかみ鏡の山はくもるともあほつて帰らへまかな
 七五二 同 さまぐらにづる心も鏡山かけ見ぬ人を恋する物は
 七五二 同 建保行年とてかみの山の月の見かけさへに雲月を哉
 七五二 同 あふみちや鏡の山の山風にはてる海やまつ水らしん
 七五二 同 鏡山つれる波かけながら空さへほる有明の月
 七五二 同 つもる雲誰かきて見ん鏡山今朝かまくれ嶺の白雪

衣笠 為家 同 為家 信実 後久我 為家 同 為家 兼盛 源順 同 兼盛 元輔 経条 隆信 順徳院 行意 定家 定家 定衛

七五八 同 氷の夜は月の影見る鏡山昔ぞつ(下冬のかたみに

七五七 同 なむわいけ冬とすみける鏡山木葉時雨て散かるほと

七五八 同 水海にまのれ影見るかみ山山のすかたも雪降にけり

七五九 同 月影のくもる絶間も鏡山色はせやかの嶺の白雪

七六〇 同 かみ山雪の木末をわいみても幾度花のかけにうつりぬ

七六一 同 鏡山立よるかけに年暮て花さへらかき歎せふらん

七六二 同 堀百をしなへて春の霞のたつ時は鏡の山もくもるなりけり

七六三 同 堀百人影もせぬ物ゆへに喚子鳥なほ鏡の山に鳴こん

七六四 同 拾玉春とみる霞なりけり鏡山こしに波うつしかの曙

七六五 同 現六雪ふれはしらお翁の鏡山松もさながら面暮りせり

七六六 同 詠蓬うれしくも鏡の山を立置てもりなき世の影をみる哉

七六七 同 愚半鏡山夜わたる月も見かくれてみくれと氷るしかの浦波

七七八 同 かみ山みかきさへたる玉椿かけも妻らぬ春の空哉

鏡山 近江 類考

七六九 同 金葉近江とよありといふなるかみ山君はこえけり人とほくさし

堅田 沖池浦 同 類考

七七〇 同 六帖古はいともかこしかた田駒つみやまなる中の玉つこ

七七一 同 みるめなまかたの興にこそす棹のしる(もつこき菴の釣舟

七七二 同 千五百波かへる君にあふみの堅田舟けりあしほまを方ぞせまき

七七三 同 建作思ひやる堅田の池にせく水のうみやたかみの駕の独り

七七四 同 愚半雲のゆく堅田の沖や時雨しんや影しめる海玉の漁火

七七五 同 玉吟にたして波間もあはる近江なる堅田の沖のよその釣舟

七七六 同 うも解てぬるも堅田の浦風に波の枕も水しにけり

七七七 同 半葉霧らも堅田の浪間よりくれぬとほくさる釣舟

俊成 七七八 同 名舟さもこそはぬらぬ堅田の浪なほ昔たにせしかの浦風

内侍 七七九 同 うも解て行めふも堅田船板もかひなき名社にけり

忠走 七八〇 同 夫木入日さすおなし堅田の浦風に波千馬妻したふなり

知家 七八一 同 首しぬと堅田の浦のあまよまかにいほよかひそ有へき

範采 同 勝野 原 近江 葦盛 高嶋郡

行衣 七八二 同 続後拾昨日まで冬籠せしかまふ野に敷のくも生出る哉

国信 七八三 同 拾遺蒲生野の玉の小山に住鶴の千年は君か御代の教なり

師時 七八四 同 名舟かまふの老紫の藤はかま千代の秋まで匂へとそおもふ

慈鎮 七八五 同 夫木かまふのしめのう原の女郎花野守にみすな妹か袖ふり

俊成 七八六 同 多とみる玉の小山の麓にてみちしかまふの野への燈は

定家 七八七 同 尋てもその世はや蒲生野の鶴は昔の跡に住らん

同 勝野 原 近江 葦盛 高嶋郡

無名 七八八 同 才七 大御船はてさもく山高嶋の三尾のから野の若しそ思

衣笠 七八九 同 大思ひするへかお馬はあれとかの原にほほきつるを

政村 八九〇 同 夫木さ波や近江のみおの山玉風勝野をゆけは花の香そす

衣笠 八九一 同 高嶋やあは河波に船とめてあすはからの原をゆかなん

政村 八九二 同 新葉暮るまで若ばはまし高嶋や勝野の原は宿もあらしそ

衣笠 八九三 同 千首高嶋の勝野の原に行くれてやり取へき方たにもほし

清範 同 神倉山 近江 名奇三当国紀伊有同名

定家 八九四 同 名奇志草かりつむはかり成けり跡もとあす神くら山

家隆 八九五 同 堀後あらも山雪けの空は成まにやらの里に雲降つ

同 海津里 同 八雲御抄 公任卿

傾阿 八九六 同 堀後あらも山雪けの空は成まにやらの里に雲降つ

仲実

親隆 後鳥羽 為家 為平 好忠 不知 匡房 同 先俊

香取浦 海沖

同 下総有同名仙寛抄香取

七九二 万七、いかに船乗しけん高嶋のかとり、浦に漕出来る船

七九七 万十一大舟のかとり、海にいかりおろしかなる命物忘れざらん

七九八 名舟けふよりほねさ取まつる船人のかとり、舟に風むかふなり

七九八 夫木浪あきき香取の海の夕塩、渡りかねた世も歎かかな

龜岡

近江 類考

八〇二 後拾万代に千世のかさねてみゆる哉、龜の岡なる松の緑に

八〇二 類聚千世へき龜の岡なる小藤原、つれしきふしけり哉

八〇二 詠藻もとめらも君かたもや、か岡に万代かたて若摘、摘らん

八〇三 夫木龜岡にまた二葉なる若、なごせ年とつむへさしるしせり

河嶋

同 名奇歌枕三吉岡撰州二

八〇四 川嶋や船木の波の磯千鳥、まのれか名もは年と頼まん

八〇五 夫木河嶋松の木陰のまほ、は千代さほひもぬき哉

八〇六 同 河嶋の松の心はしらねとも、つねはみえて年はにけり

神山

同 葉塩

八〇七 秋葉雲ちまどくよきも、みもや神山のしらし成賢見

八〇八 名舟としかば霧間を令て、神山の木しけさ谷の下くしきさ

田上より柳なる人にかはしける

柏原

同 和名三吉岡伊香郡

八〇九 名舟としかば霧間を令て、神山の木しけさ谷の下くしきさ

甲貫山

同 夫木三吉岡

八二〇 夫木秋くれはわづか山に立霧を海とて、みづる波たよなくに

龍山

美濃

八二二 同 みの国かまとの山の白くられは、烟たえ七枚敷をとする

鏡池

同 類聚三吉岡或近江

八二二 類聚水さひみぬ鏡の池に、住としは女つかり影をならへてそむる

八二三 夫木面影にみつもおしむ花の色も、鏡の池にうつりては

八二四 玉針葉君かへん千代も鏡の池水に、行末かけてすめる月かな

笠縫里

同 葉塩

八二五 名舟旅人はみの打はらひ、夕くれの雨に宿か笠ぬいの里

風越嶺

山 信濃 類考

八二六 山葉かみししの岑のつきに、咲花はいは盛ともはくや散らん

八二七 千五百風越の嶺には、春やたさらん小もとの空に霞たて

八二八 同 桜花をもち麓に咲にけり、匂ふじしるし風こしの山

八二九 名舟風越も夕えくれは、時鳥小もとの雲の底に啼なり

八三〇 同 風越の嶺よりとくる賤のめ、かきその麻衣まくりてにして

八三一 新六爰にてそ月ほゆる、へき遠近に雲吹とめぬ風越の峯

八三二 同 天の原はるけき空も風越の、岑こえてこそ思ひししるれ

八三三 同 風越にたてる山木のうち、枝は花も紅葉も有時やなき

八三四 夫木風越の岑をほるかに、引ともは雲々にみゆる望月駒

八三五 同 風こしの嶺さえ渡る秋の、よほいさきうつせきその麻衣

八三六 同 ふる雪に風越の嶺跡、絶てこえそわつしふきその旅人

八三七 同 風越の嶺こえくれは、木曾路川波まほとつらつせみの声

人丸

常陸

常陸

保季

四条

西行

季能

公経

清輔

為春

衣笠

長明

八二八 玉村風越の夢にたまらぬ白雲晴行空に鶴と降りける
八二九 十首くれ行まづあはれて風越の夢もや雲のつゞさるる覧

可保夜沼

上野 類字

八三〇 万十がつけのかほや沼のはみつらみかほねいつあをなほへそね
八三一 金葉東路のかほや沼のかきつはた香をこめても咲けりるが
八三二 天木東路のかほや沼のかほよ花時ぞともなくせなせ悲しき

片恋岡

陸奥 藻塩

八三三 六帖陸奥にありといふなるかた恋のまかを我身にぞある比が
八三四 藻塩ににしも何かしらも人玉藤の浮かししけき片恋の岡

語山 森

同 藻塩

八三五 六帖かたらひの柱のことの葉散ぬ女思ひ山のもうせかほらぬ
八三六 才ま葉小夜更かたらひ山の時鳥独ね覚の床にまこか

加嶋

同 類字

八三七 玉葉つとくも忘れず恋人加嶋なるあ限りの逢せ有や
同

霞谷

同

八三八 六帖あさか山霞の谷しあけければ我物思ひはばるよもなし
八三九 万十が山がしたひか下は鳴鳥の声たにまか何歎人
八四〇 天木金山にたかくねさる常磐木の敷におますくまも草

金山

同 八雲御抄

忠度 八四二 懐中若き女ねほほの涙に打はてて恋しき波のたぬ目くまき
為尹 347

帰山

越前 類字

無名 八四二 家集若が行道も旅も都にはまたくかふる山とありて
八四三 同 行道をうらみてのみほりほして帰る山にまづと頼みて
八四四 同 梅の花は雪にも通せかへる山して君はとはなん
仲実 八四五 松玉たよりつ我も帰るの山には霞に宿もかりの鳴なる
八四六 恋草春ふかみ越路に雁の帰山名こそ霞にかれさうけれ
八四七 同 いはかりふかき中として帰る山かきなる雪とへとまらん
八四八 玉 吟たのめてのまてふ道も帰る山には有て人行野見
八四九 同 帰る山いとはけよ白雪の道行ふりのこしの旅人
八五〇 建保都人帰る山路の跡たえぬさかひもしらね秋の夕霧
八五一 天木のか名や春にたのめて越つらん帰山路の雁金の声
八五二 同 都人くるればやめて帰山はなほはひとりともまらほりせ
八五三 御集帰山思ひつるかのしの海に契やふかき春のかり金
八五四 草庵冬とに打ひまもなく梅花帰山路は春風ぞ吹

仲実

八四五 松玉たよりつ我も帰るの山には霞に宿もかりの鳴なる

枇杷

八四七 同 いはかりふかき中として帰る山かきなる雪とへとまらん

大伴

八五〇 建保都人帰る山路の跡たえぬさかひもしらね秋の夕霧

肥後

八五二 同 都人くるればやめて帰山はなほはひとりともまらほりせ

大伴

八五三 御集帰山思ひつるかのしの海に契やふかき春のかり金

順

八五四 草庵冬とに打ひまもなく梅花帰山路は春風ぞ吹

深養

八五二 天木我もど立よりて見ん玉ひかる顔の池は水やひらりと

猿池

同 藻塩或大和

人丸

八五二 同 十二遠つかりちの池に住鳥か立てもておもも若もしと思ふ

輔規

八五三 同 十三若草をかかりちの池にしんこせはひひせしめ鶴こそ

躬恒 八四二 懐中若き女ねほほの涙に打はてて恋しき波のたぬ目くまき

忠見 八四三 家集若が行道も旅も都にはまたくかふる山とありて

中務 八四四 同 梅の花は雪にも通せかへる山して君はとはなん

定家 八四五 松玉たよりつ我も帰るの山には霞に宿もかりの鳴なる

家隆 八四七 同 いはかりふかき中として帰る山かきなる雪とへとまらん

同 八四八 玉 吟たのめてのまてふ道も帰る山には有て人行野見

唯虎 八四九 同 帰る山いとはけよ白雪の道行ふりのこしの旅人

為家 八五〇 建保都人帰る山路の跡たえぬさかひもしらね秋の夕霧

内侍 八五一 天木のか名や春にたのめて越つらん帰山路の雁金の声

後鳥羽 八五二 同 都人くるればやめて帰山はなほはひとりともまらほりせ

頼月 八五三 御集帰山思ひつるかのしの海に契やふかき春のかり金

無名 八五四 草庵冬とに打ひまもなく梅花帰山路は春風ぞ吹

人丸 八五二 同 十二遠つかりちの池に住鳥か立てもておもも若もしと思ふ

家隆 八五三 同 十三若草をかかりちの池にしんこせはひひせしめ鶴こそ

後茶 八五二 天木著鷹のかりちの池のあやれ草ヤク絶ねんも頼まし

八六〇 同 ぼし鷹の上毛吹たてふく風にかりちの原は霞ゆる也
八六一 夫木若なつむ袖とそがすめ遠つへかりちの小野の雪ほけぬらし
八六二 五音若ものみ立ててもなても思ふかかりちの池の鳥ならなくに

籠波

加賀 藻塩

八六三 名奇いたしにやすく過さぬ山伏のかこ波りもあれば有也

香嶋

能登 藻塩 名園 和名 能登郡

八六四 万七かしまななくまきとさして漕舟の楫取間なく柳しふもほゆ

片貝河

越中 仙覚抄 藻塩 云 柿自郡

八六五 万七かたかひ河の清き瀬にあせよむとに立きりの

八六六 同 かた貝河の瀬清く行水の絶る事なく有通のみん

八六七 同 暮港つ片貝河の絶ぬこと今みる人もやます通はん

辛見山

丹波 藻塩

八六八 名奇見渡ははらみ山のおもしろく雪と十年の数は降ける

神南備山

同 類考

丹波の国がみはな山をよめる

八六九 十 常盤なる神はな山に神葉をさしてせ折る万代のたぬ

八七〇 同 みしめゆふ方に取かけ神はな山の樹をかさしにて折

八七一 樓中神南備の山のけしきばれなくて時雨ふくる村雲の里

柱山

同 類考

承保元年大嘗会主基歌丹波国かつら山

八七二 新勅え方の月の柱ひ山人もとのあかりにあひにけり哉

衣笠 36才

美伊

俊頼

衣笠

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

大伴

八七三 統古照月の柱の山に家おして曇なき世にあふ秋な

加奈井山

丹波 藻塩

八七四 夫木折る事かなひの山のさねかつくれとも尽ぬ四方の人哉

八七五 藻塩いろてふ事はかなひの山水に君かち七世の影せみえける

神田里

同 類考

八七六 十 千早振神田の里の稲なれば月もしもに久しからへし

梶嶋

丹後 仙覚抄 名園

八七二 万九眺の夢は見えつかも嶋の磯とす波のよとてしと思ふ

八七三 夫木梶嶋の磯吹ゆる塩風に夕波さむも田鶴と鳴なる

八七四 夫木梶嶋の磯吹ゆる塩風に夕波さむも田鶴と鳴なる

八七五 夫木梶嶋の磯吹ゆる塩風に夕波さむも田鶴と鳴なる

八七六 夫木梶嶋の磯吹ゆる塩風に夕波さむも田鶴と鳴なる

八七七 夫木梶嶋の磯吹ゆる塩風に夕波さむも田鶴と鳴なる

八七八 夫木梶嶋の磯吹ゆる塩風に夕波さむも田鶴と鳴なる

八七九 夫木梶嶋の磯吹ゆる塩風に夕波さむも田鶴と鳴なる

八八〇 新築古霜寒き芦の枯葉はふれ山していつらかかけの漆はららん

八八一 新六塩むかふかけの漆のりり波にあはれ我身の出たかたや

八八二 樓中枝もはくかし木の浦風吹は波の花とせりみたるらめ

八八三 名奇すみれはすすふにくももる夜はもなしからさの嶋にせゆる月影

八八四 名奇いははなる神の御こいししるしめらば過行杖の道しるせよ

八八五 万十一こてさへくらの崎なるいくりとぞ深み生る荒磯にせ

八八六 万十一こてさへくらの崎なるいくりとぞ深み生る荒磯にせ

八八七 万十一こてさへくらの崎なるいくりとぞ深み生る荒磯にせ

八八八 万十一こてさへくらの崎なるいくりとぞ深み生る荒磯にせ

八八九 万十一こてさへくらの崎なるいくりとぞ深み生る荒磯にせ

美志

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

匡房

八八二 兼盛菅木引袖へ寒く麻衣かたみ山に風ふくべり
形見山 石見 兼盛成紀伊

鴨山 同 勅撰名所集並圖

八八七 万二か山石右ねしまけん我もかしすと妹か待つあらん

可良浦 同 八雲御抄或周防

八八八 万十五沖へより塩満くしからの浦にあさりするた鳴てさほさね

賀古嶋 凌駄 播磨 類考

八八九 万三いなみのも行過かてに思へは心ひもか嶋みゆゆ

八九〇 天木けふは又田鶴の鳴音も春めさく霞けけりなこの嶋松

八九二 同 この嶋松風たかく鳴たつるまきくなへに明ぬるよは

八九二 同 はりま為あかしいとなみさほくせしはしな出せかこ船人

八九三 同 この嶋樂のなごろや高からし若間につたふ葉の釣舟

八九四 同 我志はかみの波のつて純たゆたふ心むともなし

八九五 同 打はてかこの波にひく綱の行は若者に任せたらん

八九六 同 身を捨てかこの波をせし時も若はかり社志ざりしか

八九七 同 松皮もせしとも見えす播磨ちのかかむまは霧ふくくして

辛荷嶋 同 仙實抄

八九八 万秋いひひ妻からか嶋のまよより秋宿もみはけ音山の

八九九 同 六玉兼からからか嶋にあさりするうにしろめれや家思ほしん

九〇〇 続撰 女塩からか嶋に玉も刈あまも見え大ぬ五月雨ふ比

九〇一 大木玉もからか嶋のからまきお妹に逢へかたのなげれば

屍嶋 播磨 兼盛

九〇二 名奇むかしいなるかはねさして此嶋にも名を残しけん
俊頼
勝間田御湯 美作
みまさかの国にてかつまたのゆき

人丸 九〇三 表集この山やみこのかきりと思へ勝間田の女ゆとも成けり
忠見

無名 九〇四 新六波のとも風のかけたる唐琴に引とめしれぬ舟人の袖
知教

九〇五 類聚今日も又とまりやせまし唐琴の日数はかひく五月雨のころ
磯波

九〇六 夫木住吉の松風かよふから琴を波のをすけて塩や引覽
赤御門

九〇七 名奇からことの閑ゆる浪に舟とめて通ふりうら松の夕風
中務

九〇八 千首おなしくは人の手なれから琴の泊に今夜浮ぬをせん
志尹

九〇九 千首唐琴の泊しられぬ月の夜に音吹たる浦の松風
宗良

衣笠 九一〇 春雨抄足引の松吹風の通ひきて波やひくらん唐琴の浦
隆博

鎌倉 加佐目山 同 夫木二吉同

陸寺 九一二 夫木天下かざの草木まで春めくみに霞もあまねき
隆博

扶修 神村山 同 兼盛

細言 九一三 夫木万代をきてそ初る千早振神むし山の嶺の具柳
隆博

赤人 神嶋 同 類考 紀州二府同名

同 建久九年大會会主基方御屏風に備中国
神嶋有神祠所を

雅経 九一三 純拾神嶋の波の白ゆかけまも賢き御代のためしとせみる
實実

頭季 九一三 純拾神嶋の波の白ゆかけまも賢き御代のためしとせみる
實実

九一四 名奇千早振神むし山の稚葉のやとしのほに初まらん
行成

九一四 名奇千早振神むし山の稚葉のやとしのほに初まらん
行成

實実 40才

九二 類聚もはやふも神なみ岡の極の葉も雪降さけて手折山人

清行

九二 新葉思ひ出て誰か形見の浦千鳥これぞ昔の跡もたにみん

經高母

勝間浦 宮

同 兼塩 知名五佐淡郡

九二 草抄 藻刈舟遊漕くしむか嶋かたみの浦にたかけるみゆ

後鳥羽

九二 名奇思ひ出千代のぬのひのりふとにかつまの浦の岸の姫松

元輔

九二 御葉 あふ事のかたみの浦のうづせ貝むなし恋の絶ぬ年のを

西園寺

九二 同 十早振かつまの宮の姫小松ふびもたむけてつがもてん

同

九二 夫木 明るとや田鶴も鳴くん妹か嶋かたみの浦に残る月かり

長恩子
忠丸

笠間嶋

同防 八雲御抄

祐孝

九三 九かたなきの茨のしら波徒にこによりくるみなる人なしに

俊類

九二 夫木風たにがまの嶋を吹やまはさの氷はうすく成賢見

祐孝

九三 名奇 かしと山尻の盛や今ならし木方に雲の立渡るみゆ

光俊

龜頭

長門 兼塩

俊類

九三 兼塩 朝もよびもがたへ行にかしと山越んけふと雨は降ぞね

同 兼塩

かめのくひといへる所を出てまがるとして

九二 表葉 田鶴のみる龜のくひより漕出て心ほそくもなかもつる哉

俊類

九三 五月よみの尤も清み神嶋の磯間の浦に船出すわれは

同 類名 備中三有同名

借嶋

同 初撰名所集三島

俊類

九三 十五百のかけつや恋しき神嶋のいせまの浦に千鳥しは鳴

母名

九二 万六長門なる沖つかり嶋奥まで我思ふ君は千年にまも

俊類

九三 建保がよりける契結ぶの神嶋や磯間の浦のうらめしきや

頭昭

神倉山

紀伊 類名

俊類

九三 同 神嶋や磯間の浦に舟出して與つしほめて帰くんとは

知孝

九二 続古女熊野の神倉山の石たみみのほりほてとも猫斬る哉

俊類

九四 同 志ぬや磯間の波のうしみきてその神嶋にけし契は

行志

形見浦

同 類名

俊類

九四 二万九みだへの浦塩なみちぞぬ鹿嶋なる釣する海をみく帰りん

鹿嶋 紀伊 初撰名所集三島 日高郡

九三 玉吟から衣形見浦に雲消てなきたる海二のこをいとひつ

定家

九四 三万舟かしまはあそびにたやほもつらんたはふれにぞ思ひかけぬと

俊類

九二 現象よしやた形見の浦のうづせ貝むなし中はふるかひむなし

鷹司

九二 同 右一首鹿嶋も過けるに遊女の来ければよめる

俊類

九二 名奇 八月の形見の浦の朝明に出はかりたるいもか嶋かた

同

九二 方きわかれは波間に遠く行舟のかたみの浦の春の雁金

陸博

九二 類聚 妹か嶋かたみ浦のまかり舟よるもみ入す波の心は

俊類

九二 同 神岡山 類

紀伊 兼塩三島類名 大和八戸村

九二 類聚 妹か嶋かたみ浦のまかり舟よるもみ入す波の心は

俊類

九二 同 神岡山 類

紀伊 兼塩三島類名 大和八戸村

九二 類聚 妹か嶋かたみ浦のまかり舟よるもみ入す波の心は

俊類

九二 同 神岡山 類

紀伊 兼塩三島類名 大和八戸村

九四二 百九の山に紅葉としく神岡の山のみもはけふか散しん
九四三 玉葉見渡せば白ゆふかけて咲にけり神岡山の初梅はな
九四四 夫木神岡の嶺のあらしやぬらんせの山もとに紅葉もる也

風早

伊予 和名も田風早即
其儀後

九四七 堀豆かばやの沖つほきひたかく共いたてはしれむの浦まで
九四八 同後風早のなるとの浦の船まりも泊にためぬ我身成けり

鏡河

土佐 夫木昔四式越平

九四九 夫木かみ川影見今月に底すみてしむみくつのはつかしと哉
九五〇 同 かけつと思ひし物を鏡河浅ましくも絶し水かな
九五二 同 遠近の岸の青柳ひまなくて洲瀬もみえぬ鏡川かな

香椎 為

筑前 類考

九五三 六時つ風吹へけりぬかしぬ湯塩すきはに玉藻列ては
九五三 同 行帰りに常に見し香椎のあすよりにははみんももなし
九五四 夫木かしらぬ夕霧隠れづればあめ鳴わに千鳥はけり鳴
九五五 同 しほたればあまにも袖をかきみ為磯なつみにも波を分つ
九五六 兼集箱崎の松ほまじに緑にて香椎の為もつみほきえす

金御崎

筑前 類考

九五七 万七もほゆるかねの御崎も過れ我は忘れすしすの御
九五八 名舟つくしなる金御崎は浪たてはてのせせ思ひしらる
九五九 新大 白波の若うつ音やひくしん金御崎のあつきの声
九六〇 兼集音はくかねの御崎はきもせずなく声ひく渡り成けり
九六一 聞あかす金の御崎の浮枕夢路も波に幾夜へたてぬ

無考

泉寺

刈萱関

同 類考

泰光

九六二 新古刈萱の関守のみ見えたるはくもゆるまきね道なりけり
九六三 類聚 けよりか心にそへて身にもなる思ひみたれし刈萱の関

公東

九六四 藻塩せはくともしゆやの軒に宿かしん夕立過るからかの関
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

不知

九六七 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六八 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六九 同 夏深まかやのふ小野の萱延短き夜ほのふしのもなし

頭伸

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

不知

九六七 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六八 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六九 同 夏深まかやのふ小野の萱延短き夜ほのふしのもなし

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

同

九六二 万五草枕旅をくるしみ志をればかの山に棒鹿なくも
九六三 六帖都より西にありてふかま山畑たえぬ志もする哉
九六四 夫木下われのむやの山畑に鳴鹿のまこそ乱て葉をこふらめ
九六五 可思布江 同 藻塩
九六六 可也山 辺野 同 勅撰名所集三巻扇橋屋前

光俊 430

無考

大判官

小町か

如家

為家

人丸

重之 431

匡房

中務

宗良

鏡神

肥前 類字

九七二 玉島登君にも心たかはし松浦なる鏡神をわけてまかはん

九八〇 同 年をへて初る心りたかみは鏡神をもつししやみん

九八二 千載逢見んと思ふ心は松浦なる鏡の神や暗にさくらん

九八二 名舟行ぬくりあふと松浦の鏡には誰をわけて初るとはしる

香春

豊前 藻塩

九八二 才九豊国のかはるけわき(ひもの子にいつかりませははるは我家

抽頭花山

同 藻塩

九八四 又木春の日のかさしの山の梅花もりかふことに休にたつ

鏡山

同 仙寛抄ニ当國近江有同名

九八五 万三祥る引豊国の鏡山みすてなごらば志しけんがも

九八六 同 大君の親睦相や豊国のかみりの山を宮と定むら

九八七 才三豊国の鏡の山若くたく隠れにけらしめてもまます

九八八 玉吟やまよらうひでにみるべき豊国の鏡の山も我君のため

九八九 新六豊国のかみりの山の曇らぬにみかりもせて出る月影

笠縫嶋

豊後 類字

九九〇 万三しは山打越みればかきぬの嶋さきかぐる棚無小船

九九二 新撰置ゆひの嶋立かす朝霧にいや遠さかるとなにし小舟

九九二 夫木山跡より見えしかみえぬ夕かな霞にけりし笠縫の嶋

九九三 御集置ゆひの嶋さき別漕舟の跡ゆく波のあはれ世の中

九九二 十首しは山打出てみれば霞むなり朝日影さす笠ゆひのしま

九九五 名奇頼物ともあまのこなたにみえぬわなはす(さからの奏に

香山

同 対馬 八雲御抄

九九六 名奇かの山に雲わたなひきおほしきあみしころと後志んかも

懸嶋

同 未勘

九九七 千載卯花よとくし懸嶋の波もさそは老も越ししか

狩府原

同 同

九九八 新助 梅麻のかり山の原をけみみれば外山かたかけ秋風を吹

河添関

同 同

九九九 藻塩 河岸のらからむ竹のわれくたけ朽ても水の川さみの関

〇〇三 新六川せひなきのふらくお打捨てかふるみくつの下に朽つこ

加佐々幾山

同 同

粉川の観音の茶意法師に告給ひける歌

〇〇一 玉葉花衣がさき山に色かへて紅葉の洞の月を詠めよ

笠鷺川

同 未勘

〇〇三 名奇かきさの河風立ぬ七夕の紅葉のしほり波やかくらん

仮寝岡

同 同

〇〇三 夫木秋の野のかりぬの岡に住鹿の我がことし物思ふかな

甲斐沼池

同 同

〇〇四 同 心ゆく水のけしきはけふそみるこやにかへるかひ沼の池

陰漆

同 同

泉良

457

俊頼

好志

464

前大臣

説知人

紫式部

〇五 千首月はまたとせかりぬへし松たてら陰のみむとの夕關の空

垣津谷

同

為尹

語岡

同

46ウ 〇一三 千首 塚身はへうとくとも時鳥なれたにせめてかたらひの岡

為尹

〇六 玉吟くはくの雷とつればは山かつの谷なるこ引しん

〇七 同 白雲の衣ほすてふ山かつの垣津の谷は日影やはさす

片敷山

同

同

〇八 大輪夏衣たしき山の時鳥鳴声しけく成まごころかな

柏枝宮

同

くみへ

〇九 新葉高御座とほりかうけてかしはえの宮もしるき春かな

貞婦崎

同

後村上
御製

松葉名所和歌集第四終

〇一〇 夫木吠匂ふかほよの崎の女郎花誰かほみたと尋こさしん

神我手

同

忠隆

〇一一 才七塩みたはいかにせんとかわたつ海のかみかて渡らあまの乙女子

加古河

同

〇一二 夫木旅人の駒打わたす武蔵あふみたなぞかくるかの川なみ

川崎

未勘

為家

47オ

聖観音さまより

〇一三 千首すくへし遠の糸に引むすひよし川崎のせむ成とも

桂嶋

同

為尹

〇一四 天木尋きてたくり返しかつら嶋いはや物を液はかく夫

陰石井

同

後丸茶

〇一五 同 ときは木のかげの岩井の志木夏をおほえぬ名にこそ有けれ

片別入江

同

為家

〇一六 才舟をよぐ塩風累み片せきの入江にひとあむの村鳥

杏人浜

同

〇一七 才舟ありせへにきてくあまから人の衣と過れば恋しく有なり